

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

On "the Youth in the Street"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1956-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 慎吾, Kawai, S. メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2209

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『街頭の青年』について

—— 現代日本教育の新しい課題として ——

河 合 慎 吾

I 「街頭の青年」とは何か

—— それは、なぜ教育の新しい課題であるか ——

I

「街頭の青年」という、やや耳なれない漠然とした標題を掲げたので、まずはじめに、ここにいわゆる「街頭の青年」とは何か、少くとも本稿においてはこれを如何に解し、従ってまた如何なる態度と方法を以て、それを解明せんとするかを明らかにしておきたいと思う。それは同時にまた、何故に我々がこれを「教育の新しい課題」として提起しようとするかの理由も明らかにするであろう。が、しかしその前に、ひとはこの言葉から、一体、何を連想するであろうか。

かつて、この国のある学者は、⁽¹⁾「街頭の青年たち」と題する警拔なる一文において敗戦直後、陸海軍の解体と軍需工場の解散とによって街頭に吐き出されながら、学生の如く学校に戻って学校を媒介として社会との間に関係を見出して行くことのできない一般青年、一定の社会的な Status を、否、社会との関係それ自体を見失っている青年達を論じ、放置された彼等が、不可避的に反社会的集団に身を投ずべきこと、およびいわゆる「教育の社会的分散」によって、これらの青年達の教育問題に対処すべきことを説いた。また、一方では街頭児とは浮浪児の別称である由である。⁽²⁾ひとびとの連想も、おそら

くこれらの用例に近いものであろう。しかし、我々が今ここに、「街頭の青年」なる言葉の下に設定しようとする概念はやや異なる。我々は「街頭」という言葉を以て、現代の市民生活の中、家庭、学校、職場等の一切の組織的集団から解放され、そこに多かれ少なかれ、行われている意識的な教育活動の影響外にある部分を指すこととし、青年達がこの部分において生活している時、これを「街頭の青年」と呼ぼうと思う。従って、彼等は必ずしも、学生であり職場人であることを妨げない。いっさいの青年達は、「時に」街頭の青年となるのである。

いわゆる「街頭の青年」をかく解すれば、それが現代社会におけるいっさいの組織的集団の性格の変化、否、総じて現代社会そのものの変動過程と、それに伴う教育や人間形成過程の根本的な変化に、密接な関係をもつものであることは明らかであろう。いうまでもなく、我々の社会は急激な変化を示しつつある。この変動過程にある現代社会は、周知のように一応、大衆社会(mass society)として特徴づけられる。「大衆社会は、近代の創造であり、分業、マス・コミュニケーション、および多かれ少なかれ民主的に得られた合意の産物である⁽³⁾」が、大衆社会としての現代社会は、構造的には、次の二大局面を示すといわれる。すなわち、一方におけるインフォーマルにつくられたうちとけた集団から、現代の会社、組合、教会および国家の如き、高度に形成された組織体にまで及ぶさまざまな組織された諸集団の複合としての面。他方には、分散されたバラバラの個人が唯、マス・メディアによってのみ結び合されている巨大な大衆の群としての面。ひとは、現代社会では、この二つの局面において生活している。すなわち、彼は家族の一員として、会社、組合、学会の一員として、さらには国家の一員として生活するとともに、大衆の一員としても生活する。そうして、この生活の二つの局面における比重は、現代、ある意味では後者の方が増加しつつあるというべきであろう。というのは、例えば今日では、ひとはおそらく自己のバースナーティの形成上の影響が、自己の属する種々の社会集団におけるよりも、大衆の一員として

の方がはるかに多いことを知るであろうから。我々のいわゆる「街頭の青年」は、このような現代社会における大衆の局面において成立する。

以上のように、一九世紀から二十世紀にかけてのいわゆる第二次産業革命による飛躍的な生産力の上昇、通信交通技術の異常な発達、巨大なマス・コミュニケーションの出現は、我々の社会の様相を一変し、いわゆる大衆社会を生み出すとともに、教育と人間形成の場に決定的な変革をもたらした。日本も勿論、この例外ではない。現にあるアメリカの学者も、大衆社会の特質として、「合理性、インパーソナルな関係、社会的役割の極端な専門化、密集した人間の間にいながらの個人の孤独、親密感と安全感の欠如」をあげ、「このような社会では暗示、説得、宣伝、煽動、および、群集的行動の他の局面が共通して見られる」ことをいうとともに、同じ書物の別の箇所において、日本社会には、「きびしい階級組織とともに大衆社会の特質も多く見られる」ことを説いている。否、後にも説く如く、その内部に前近代的なものを深く温存しつつ、大衆社会の特質をかねそなえざるを得ない所にこそ、いかえれば、それが一方における直接的接触の世界における身分的結合原理をもった集団と、他方における間接的接触の世界におけるバラバラの個人からなる大衆社会との交錯の上に成立しているという所にこそ、現代日本社会の悲劇があるというべきかも知れない。

ところで、一般に、大衆社会としての現代社会における教育や人間形成の場の変化の具体相は、如何なるものであるか。例えば、あるイギリスの高名な学者が、ロックやルソーの教育論は、親や教師が朝から晩まで、少しの隙間もなく、子供の教育に努力し、献身するという前提に立脚しているが、これは全く時代遅れの思想であるという意味のことを語る時、この問題の一つの側面が指摘されているというべきであろう。またあるアメリカの学者は、この間の消息を次のように描いている。

——1945年6月、原子爆弾が、人類の親善、交際関係に、どんな衝動をあたえたか、それは筆紙にはつくせない。人類が生きのこるために、一番大切

なもの教育である。ところが、教育の責任は、自分達の責任ではない、という言葉が流行してきた。

映画人はいう、「映画は娯楽だ。教育の責任はラジオの受けもちだ」と。

放送人はいう、「ラジオは娯楽だ。教育の受けもち新聞だ」と。

新聞人はいう、「教育記事をのせるだけの紙面がない。教育は雑誌社の役目だ」と。

雑誌人はいう、「書物こそ教育の役割をひきうけるがよい」と。

出版人はいう、「教育者達の無能や能率不足をおぎなうのが、私達の責任ではない」と。

学校側はいう、「両親が教育しそこなった子供達を、学校教育でどうすることができるか」と。

両親はいう、「教会が子供達の教育に熱心でない。教会は無責任だ」と。

教会はいう、「このごろの映画が、子供達に悪い影響、感化をあたえて困る」と。

このように、かなしくも、さびしい循環——責任のなすりあい流行している。(そこで)「両親や教師や牧師達が、どんなに英雄的な努力をほらしても、ラジオ、新聞、映画がコミュニケーションの責任をつくそうとしないなら、両親、教師、牧師の英雄的な努力もむだになる。そして、人類は原爆時代に生きのこる見込がなくなってしまう！」

勿論、日本においても事情は同じである。身近な例をとれば一般大衆は、その行動に当って小学校の先生の訓戒を想起しはしない。横町のお嬢さんが例えば彼女の恋愛事件に際して如何に行動するか、それを規定するのは学校における彼女等の経験でなくして、映画の影響であろう。映画の人物がそうした場合に、そうした行動にでることが通例であれば、彼女等もまた、知らず知らずの間にかくの如く行動するであろう。劇映画は宣伝ではないが故に、甚だ多くの宣伝効果を有する。お説教ではないが故に、的確に民衆の実践道徳に影響する。しかも、映画は圧倒的に若いひとの娯楽であり、映画観客層

の年齢配分は、最も多いのが18—25才の層、これにつぐのが17才以下の中学生、高校生と26—35才の層であるという⁽⁸⁾。「結局、ティーンエイジャーたちの個性、そういうものを作ってゆく機関というものは、大体、映画とそれから自分達のグループでの話、そういうことでしょうね⁽⁹⁾」というある軽演劇俳優の観察に誤りはあるまい。ラジオの影響力も、もとより映画に劣らない。一例として小学児童の場合をとれば、この間の事情は、例えば、例年のNHK放送文化研究所の実施する種々な型の全国調査によっても、数字的に見事に実証されている。例えば1952年3月の調査によれば⁽¹⁰⁾、「劇の放送を聞くのと外で遊ぶのとではどちらがすか」という問に対し、ラジオのある家庭の児童では、「劇の放送」45%「外で遊ぶ」22%、「同じくらい」32%、「不明」1%。同じくラジオのない家庭の児童はこの四者の間の割合が、39%、29%、28%、4%。以って、現代の児童生活の変化の一斑が察せられよう。また1954年10月の調査では⁽¹¹⁾、「ラジオで聞いた歌でみんなの間にはやっている歌があるか」との問に対し、都市型児童では「はい」77.5%、「いいえ」20.8%、「無回答」1.5%、同じく農村型児童では、81.2%、16.4%、2.4%となっており、流行している歌としては、いずれも「お富さん」を第1位にあげている。もとより、一例にすぎないが、これらの事実は1948年当時、アメリカで314名の専門家（148名の小児科医、22名の社会学者、72名の精神科医、72名の心理学者）の中、90%までがラジオのスリラー番組が子供達に有害な心理的影響を与えることを認め、93~97%までが健康上有害であるとなし、さらに81%までが、今日のラジオ番組が子供の犯罪や反社会的行動を助長していると感じているという事実が、日本においてもまた同様に、あてはまることを、証しているということが出来るであろう。「ひとをだますよりは、むしろひとにだまされた方がよい」という学校その他で教え説かれる公式的な価値をしりぬに、ラジオや映画が伝える「だまされるよりは、だませ」という非公式的な価値の訴える力の強さ！ しかも、現実の社会の姿が、この非公式的な価値の勝利と支配を示しているとしたら、その結果はどうか。この現代社

会における価値の分裂の間に、青少年不良化の源泉があるとする考え方には、⁽¹³⁾一面の真理が認められよう。まさに、ロックやルソーはもとより、ベスタロツィやフレーベルさえもが、夢にも知らなかったような人間形成上の一大変化が、現代社会にあらわれて来たというべきであろう。教育と人間形成が、家庭と学校と教会と職場の指導者にゆだねられていた、古きよき時代と異り、その本来の公共性が専ら利潤的動機と結びつき、従って何等教育的意図をもたない映画や放送や新聞などのマス・コミュニケーションによって、実際の人間形成がおこなわれることこそ、二十世紀の人間悲劇の一つでもあろうか。

さきにあげたイギリスの学者の言の如く、親と教師が被教育者の全生活をおおっているという前提の時代錯誤であることは、既に明らかである。しかし、更に大切なことは、現代のいわゆる大衆社会においては、親や教師が被教育者と直接的な接触の関係にあるときにも、既に彼等の性格自身が根本的に変化しつつあるということであろう。このことは、例えばあるアメリカの⁽¹⁴⁾学者によって次のように説明される。彼は社会を歴史的に見て三つの類型に分け、伝統志向型 (Tradition-Direction) 内的志向型 (Inner-Direction) 他人志向型 (Other-Direction) を区別する。伝統志向型では「社会秩序が比較的不變なので、個人の適応は」伝統的なものに順応し、「文化は細部にわたって個人を統制する。」内的志向型の社会は「ルネサンス、宗教改革とともに生れでて、いまは消滅しつつある社会」で、ここでは個人に対する方向づけの源泉は伝統ではなくて、幼少期において両親年長者によって植えつけられた権威の内在化 (良心) にあるという意味で内的志向型である。すなわち確立した個を媒介とした安定性という宇回性に近代の性格がある。伝統に同調する静態的社会から、動態的な商品生産社会へと転化したこの開放された社会にふさわしい心理的メカニズムは、「比喩的にいえば心理的ジャイロスコープともいべきものであり、この羅針盤に従って、彼等は *ad astra per aspera* の方針を堅持する。従って、この針路を踏みはずした場合は、彼等は深い「罪」を感じる。伝統志向型の社会に特徴的なことが「恥」の意識であったのに対し、

内的志向型の社会に特徴的な感情は「罪」の意識である。第三の他人志向型は「現代人の分析である」が、ここではいっさいの規準が内部の世界ではなく、外部の世界にあるという意味で他人志向型であつて、これは国際的な傾向である資本主義、産業化、都市化のうちにあらわれる。ここでは、マス・コミュニケーションはさまざまな局面で読むこと、話すことの量を増加し、「外部の世界と自分との関係は、マス・コミュニケーションによって媒介される。」このマス・コミュニケーションと学校、同輩集団、宣伝広告の媒体が、もはや心理的ジャイロスコープを無用にして、子供の関心は広く社会にむけられる。この段階では両親と教師の役割は変化して、子供はただ、マス・メディアが伝える情報や同輩集団の意見から行動の基準をみちびき出し、それだけにまた他人の意見、趣味、流行が気になりになる。他人志向型の社会は、個人の適応が他人によって方向づけられるものだから、もはや古い羅針盤では役に立たず、新に心理的レーダー装置をそなえて「他人からの信号に細心の注意をはらい」、「他人からの行動や願望に極端に敏感であることによって緊密な行動上の適応を」得るのである。この段階における「親の態度のこの変化において、コミュニケーションのマス・メディアは二重の役割を演じている。同輩のみならず、マス・メディア——ラジオ・映画・漫画——から、子供達は、親の行動の規範は何であるかを容易に学び、これを親の頭上に掲げる。かくして、伝統志向に依存する社会におけるよりも、ずっと簡単に、財産たる一種のリアリズムが子供に再びあたえられる。他人志向型の子供は、譬に出てくるハーヴァード卒業生のように親が子供に告げ得ることはほとんどないことを、両親よりもよく知っている。」しかもまた「親達はまた親達で、マス・メディアに、志向の源泉をもっている。彼等は、子供を如何に育てるべきかについて不安の念をもって、書物、雑誌、政府のパンフレット、ラジオのプログラムにますます関心を向けて来る。」云々。以上のように親も子も教師も一切の価値や行為の規準をマス・メディアに求めるような時代、ラジオや印刷物が家庭や学校にもたらすモデルが一切の規準となるよ

うな時代、この学者のいわゆる他人志向型の社会における親や教師の役割の根本的な変化については、これ以上説く必要はあるまい。だが、念のために、我々が身近に経験している具体的な事例の一つ、二つを次にあげておこう。

例えば、ある新聞の報ずるところによれば、最近の児童のラジオの聴取傾向にあらわれた顕著な変化の一つは、一般娯楽番組に、こどもが強い関心を示して来たことであるという。電通が1955年5月、大阪市内の小学校高学年を対象として調査したところによると、「お父さんはお人好し」「漫才学校」が1、2位をしめ、子供向き番組としては、「ハリスクイズ」が三位に顔を出す程度で、四位以下も娯楽番組が続き、そのうえ「アチャコ調や漫才調の会話が流行して、大人を大にあわてさせた。これは大阪だけの問題でなく、関西弁の通用する地方一般の現象であつたらしい」と。すなわち、アチャコの「お父さんはお人好し」が、毎週一回、一度に数百万人の人を笑いこぼさせている時、いつの間にか、父親のモデルとしてアチャコ的類型が暗黙のうちに作りあげられる。この意味で、あるアメリカの社会心理学者も⁽¹⁶⁾いうように、「数百万の異質的な人間が、同じ冗談にいっせいに吹きだすということは、決して小さな意味のことではない。なぜなら、それは全体としての文化を特徴づける共通の態度を、一層つよめ、拓げるからである。」ここでは、子供達は、「お父さんはお人好し」におけるアチャコの言動を規準として、これと比較して自分の父親の態度を批判し、その厳格さと無理解さを嘆く！ さらにまた、無着成恭氏の「山びこ学校」や小西健二郎氏の「学級革命」が、ベスト・セラーとして驚異的な版を重ねてゆく時、その読者たる多くの父兄や児童によって、多くの教師が、これらの著者との比較において、その無能力や努力の不足を責められる。一方、ある教師達は、自らもこれらの著者の示した規準への模倣をこととし、また努めて及ばざる劣等感になやまされる。戦後の新しい教育の輝かしい成果として「山びこ学校」や「学級革命」の出現をよろこぶとともに、マス・コミュニケーションの機構にのつたベスト・セラーとしての、これらの書冊の果す役割とその効果の行方について、また別の深

い反省を必要とするゆえんであろう。

しかし、問題はさらにこれにとどまらない。むしろ、ここでは、ここにマス・コミュニケーションによって提出されたモデルや理想像が短命であり、また相互に矛盾すらしていることこそ、さらに問題とすべきであるかも知れない。例えばある学者⁽¹⁷⁾もいうように「圧倒的な数におよぶラジオ、シヨウや映画や漫画本や広告は、子供達をして、たえず別々の人物に自分自身を同化させるにいたる。その際、同一にとどまるものといえ、成功、力、結婚とかいった、外面化された抽象的観念の幾つかにすぎない。」この相互に矛盾した短命なモデルや理想像は「大人になってからの生活のバックボーンを形づくるほど長く、かつ深く影響される数少い具体像の衝撃を青年達に、経験せしめることを許さない。」このような状態の下において、もはや「個人の行動は、変化する情況の単なる函数になる度合がますます増大し、表現の意味を失って、社会的、政治的引きまわしの函数に化しする。個人の行動は意味の統一を持った特殊な生活経歴のもたらす所産であるとは、ほとんどいえない」のであり、かくて、「さまざまな娯楽企業のマス・プロダクションといった因子は、自律的人格の発達を妨げざるを得ない。」このように、個人の行動が、変化する情況の単なる函数となる場合、「年の若い方が年上の連中よりも、この課題に一層よく適している。」「こうして、典型的な心理的事実を形づくるものは、もはや父親に対する息子の恐れではなく、逆に息子に対する父親のひそかな恐れである。この恐れは、常に潜在的であったが、今や社会の中におこった幾つかの変化によって、充分表面化されたのである。」以って、現代社会における教育や人間形成の場の性格の変化、親と子の、そこにおける関係の変化の一面を知るべきであらう。

2

以上我々は、我々のいわゆる「街頭の青年」の発生の基盤として、現代社会の変化に伴う教育や人間形成の場の根本的な変貌について素描した。それ

は専ら、新聞、雑誌等の発行部数、映画館の数、ラジオとテレビのセット数などの飛躍的な増大によって象徴される如きマス・コミュニケーションの異常な発達に基くものであった。いうまでもなく、マス・コミュニケーションは、物的交通手段の発達と相並んで、いわゆる機械時代における現代社会そのものをささえている。万一、これらの二つのコミュニケーションがとだえたならば、生命の再生産はもちろんのこと、社会の再生産も全く不可能になることは改めて指摘するまでもない。それは自明のことですらある。しかし、それらの物的交通手段やマス・コミュニケーションが、人間と社会にとって、何を意味するかは、必ずしも自明のことではなさそうである。それらは確かに、機械時代とそこにおける人間と社会をささえてはいる。しかし、そのささえ方は、どのようなものであるのか。殊にそれは、人間の再生産としての教育と、どのようにからみ合うのであるか。それらの点については、なお、少し一般的な考察の要があろう。そこで、次にこの問題をマス・コミュニケーションと教育の関係に一応限定して、我々の当面の課題たる「街頭の青年」の発生を論ずるに必要な限りにおいて、また現実の日本の問題を中心として、極く簡単にふれておこう。

この国の社会教育の最高の指導者の一人は⁽¹⁸⁾かつて、「社会教育の発達をささえる大きな二つの条件は、やはりデモクラシーとテクノロジーである」となし、「一般に民主主義の発達と通信、交通手段の発達とは、わかち難く結びついているが、民主主義の嫡出子である社会教育の発達もまた、あきらかにコミュニケーションの技術の進歩によってささえられている。二十世紀における義務教育制度の普及によって、文明国では、だれもが読み書きができるようになったことと、大量的な通信手段の発達——いわゆるマス・コミュニケーションの発達という二つの条件が、社会教育の発達のいわば技術的可能性をもたらしたのである」と説いて、「二十世紀わけても最近四半世紀」の「このようなコミュニケーションの技術の未曾有の急激な発達に」よって、「社会教育の発達は、どのように促進されることであろう」と讃えている。この社

社会教育の基礎としてのマス・コミュニケーションに対する希望にみちた見とおしと楽観的態度は、あたかも、世にコミュニケーションの過程に投じて解けぬ問題はないという、例えばかのデューイのある時期の哲学にその典型を見出す如きアメリカ的コミュニケーションの哲学が、⁽¹⁹⁾ここにも生きているかの如くである。勿論、この学者もまた、別のところで「人々の視野を一面的に局限し、一方的な結論を人々におしつけ、人々を威嚇して自由な討議をひっそくさせ、かくして人々を暗愚にすることに、マス・コミュニケーションの諸手段が用いられるとしたならば、どうであろうか」とてマス・コミュニケーションの悪用に対する警戒を説いてはいる。しかし、我々はこの程度の警戒と反省とにとどまることなく、むしろこの学者が社会教育をささえる二つの条件としてあげた、デモクラシーとマス・コミュニケーションとの間に、発生する矛盾関係を的確に認識することから、出発しなければなるまい。

現にアメリカにおけるコミュニケーションの哲学の存在が、十八世紀に当時の精神を以て成立したまま、十九世紀の風浪を知らずに発展して来たアメリカ社会の特殊事情に基づくものであることは周知の如くであり、従って1929年の大恐慌以来十八世紀的な夢の破れた以後は、その国においてもマス・コミュニケーションの生み出す「批判的能力の無条件降伏と思惟をぬぎにした画一主義」が指摘され、その「社会的麻醉剤として最も確實で効果的」であり「余りに効果的であるが故に麻醉剤の常用者が自分自身の病気に気づかないほどである」というおそろべき性格がはげしく批判されて既に久しく、⁽²¹⁾多くの高名な学者達も「新聞やラジオや映画が、常に群集的感情を伝達させ⁽²²⁾発達させがちである」旨を強調している。勿論、タルドによって示された、空間的に散在しながら精神的に交渉し合っている諸個人を含むものとしての公衆の存在をささえているものは、コミュニケーションの発達である。公衆はコミュニケーションの利用によって、空間を征服する所に成立する。しかしながら、我々は、そのコミュニケーションが、かつてタルドが「公衆」という概念を構成した時代のそれと全く別のものになっている点に、改めて注

目せねばなるまい。すなわち、それは現代においては、ただ大資本によってのみ設立され、運営される如き巨大な規模の独占的経営体から、一方的に投げ出されおしつけられるニュース、解説、意見等を人々は受身の態度をもって、受取るのみの形に変じている。ここでは、コミュニケーションという言葉が暗黙の中に前提していた相互作用的要素は失われ、一方的なマス・コミュニケーションの流れがあるのみである。そして、このマス・コミュニケーションの社会においては、公衆と群集の現実的結合としての大衆が、資本主義と機械主義を通じて、「自ら考え、自ら判断する能力を失わせ」られ、理性的に思惟する公衆の性質を喪失して、暗い非合理的な群集の方向に顛落して行き、大衆はここに、「新しい群集」となる過程は、既に多くの学者によって分析されている所である。⁽²⁵⁾

しかも、ここで我々の最も注目しておかねばならないことは、ここにいわゆる「新しい群集」は、実に現代の日本社会においてこそ、最も発生し易いのではないかという一事である。すなわち、さきにもあげたあのイギリスの学者の指摘する「教育が知性や自由な思考に対する、主要な障害物の一つとなるという逆説的な事実」あるいは、教育によって「読むことができるようになって、却って子供が事理を探り、独自の自己の意見を持つことができなくなる」という皮肉な事実を実証するかの如き教育が、多年にわたって行われ、その学者をして「知性をぬぎにした知識を与えることにおいて、最大の成功を収めた」国であると嘆ぜしめたこの国においては、同じ学者の「浅い知識が、広く普及している社会こそ、最も宣伝に動かされ易い」という言に顧みるまでもなく、「新しい群集」発生のための最適の土壌が用意されていることは明らかであろう。このことは「教育」と「宣伝」とを明確に区別することによって、一そう明らかにすることができる。すなわち、一般に人間の行動は環境に対する反応として行われるといわれる。しかし、ある人もいうように、「人々はこの複雑な世界において正確な実在の様相を把握することはできない。」⁽²⁷⁾「それ故に、彼等は自分の好みに適合した世界、自分の行動に影

響を与える世界を構想する。」彼等は現実の環境そのものではなくして、それについての各自の判断によつて行動する。従つて「彼等をとりまく現実の諸条件は、これらの諸条件に関する彼等の概念ほど重要ではない。」「宣伝」と「教育」とは、いずれもこの環境についての概念、環境判断に関係する。しかも正反対の方向において。すなわち、宣伝とは、宣伝者にとって都合のよいような環境判断を被宣伝者に与えることによって、被宣伝者を自発的に宣伝者の欲するままに動かそうとすることであり、教育とは、このような宣伝に抗して、被教育者の環境判断が眞の正しい環境の認識であるように、一部の宣伝者の利益のためにではなく、彼等自身にとってまた社会の進歩にとって、眞に役立つ環境判断であるように、正しい環境判断の能力を被教育者の間に培養しようとするものである。したがつて、宣伝が民衆を知的に従属させるものであるとすれば、教育は民衆を知的に独立させるものというべきであらう。そして「民主主義とは教育のことである」という有名な言葉をひくまでもなく、眞の教育により知的に独立した民衆（周知のように、それが「公衆」の眞の意味である）こそ、民主主義の基盤であることはいうまでもあるまい。

このような見地から見れば、敗戦以前の日本に宣伝はあり、錬成はあったにしても、眞の教育の名に値するものが多く見られなかったことは明らかであらう。というのは、そこにおけるいわゆる教育の主な任務が、全国民に対し、彼等自身の幸福のためにではなく、一部の人の利益のために都合のよい環境判断をするように教えこむことであつたことは、歴史の証する所であるからである。勿論、敗戦以来、既に十年、民衆を知的に従属させる宣伝ではなく、民衆の知的独立を計るための教育の自由が形式的には保障され、一時は新教育の推進が叫ばれもした。しかし、その実際の効果は果して如何。一時隆盛を極めた新教育の声の下にすら、また最近横行しているいわゆる「新教育の反省」の呼び声の下に、依然たる宣伝と教育の昔ながらの混同の事実が見られるのではないであらうか。我々はかつて、勿論、自己をも含めて、

この国の人間像を、下半身を前近代的な因襲を中に浸しながら、それを意識せず、頭で流行をおっているものとして描き、その人々の心の深層にひそむ「号令をまちこがれる」傾向を指摘したことがあった。⁽²⁸⁾今、外国の学者が、マス・コミュニケーションの弊害として、問題にしている「批判的能力の無条件的降伏と思惟をぬぎにした画一主義」は、我々の社会の暗黙の前提であり、極言すれば、この国のいわゆる教育の多年にわたる目標ですらあったかも知れないのである。ある学者の⁽²⁹⁾いわゆる民衆の「価値を命令してくれという叫び」は、この国の民衆の間においてこそ、普遍的な現れであったのであり、現にまたあるのではないか。このような前近代的な人間類型に満ちた社会において、発揮されるマス・コミュニケーションの威力については、思い半ばに過ぎるものがあるであろう。

元来、「教育がある段階において、中正な判断に達する方法を教えることによって、子供達を宣伝の影響からできるだけ解放すべきである」こと、あるいは「単純なきまり文句を利用したり、⁽³⁰⁾事実無根の善玉悪玉を強引に取りあげたりする技術の駆使によって、民衆の群集感情に訴える老獪な宣伝者から民衆を守り、民衆の個々の洞察力をできるだけ活用させようとするための社会教育の必要」⁽³¹⁾については、今更いうまでもなく外国の学者も多く説いている。しかし、我々は上に見たような我が国の特殊事情、前近代的な人間の上に振うマス・コミュニケーションの威力のおそろしさを思う時、特にこの点を、現代のこの国においてこそ、強調する必要を感ずるのである。このことの重要性は、ここで、さきあげたアメリカの学者の人類の歴史的社会的の三類型を想起し、これと我が国の場合とを考え合せて見れば、さらに明瞭になるであろう。というのは周知の如く、アメリカのある文化人類学者は、⁽³²⁾日本の文化の特質を「恥の文化」と規定し、欧米的文化の「罪の文化」と対立させている。ここに「罪の文化」とは、近代におけるように内在化された権威（良心）への服従、すなわち「罪」の意識が個人の行動原理となっている文化であり、「恥の文化」とは、顔、面子をけがされることに対する恐怖、すな

わち「恥」の意識が、行動への心理的規制力となっている文化であって、例えば、マックス・ウェーバーの「内的道徳」と「外面道徳」の対照にも、ほぼ照応するものであろう。従って、これをさきのアメリカの学者の三つの社会類型の分類についていえば、「恥の文化」は「伝統志向型」に当り、「罪の文化」が「内的志向型」に相当することは明らかであろう。また伝統志向型の「恥」、内的志向型の「罪」に相応する第三の「他人志向型」の心理的規制原理として、この学者は「不安と懊悩」をあげているが、この心理的装置を内的志向型の「罪」をジャイロスコープにたとえたのに対して、レーダーを以ってたとえていることは前にもふれた。ところで既述のように、アメリカでもマス・コミュニケーションの急激な発達、今や、「ルネサンス、宗教改革とともに生れた」『内的志向型』の社会をうちくずし、「他人志向型」の社会を作りつつあるという。そうして、マス・コミュニケーションの異常な発達と、大衆社会の特色は、日本社会においても、前にもふれたように遺憾なく見ることができる。まことに、この点こそ、我々日本人が、その生活のあらゆる面に前近代的なものを強く残しつつ、世界的な機械文明の技術的進歩の影響を、最も強くこうむっている部面であり、ある人もいうように、現代の日本人が「機械を云々し得る唯一の領域」であるかも知れないのである。とすれば、どうということになるか。「伝統志向型」社会と「他人志向型」社会の歪な結合！ 前近代的な「恥」の意識と「不安と懊悩」との、まことに奇妙な結びつき！ そこに発生する「新しい群集」の様相のすさまじさについては、もはや多言を要しないであろう。かくて、「新しい群集」の問題は、とりわけ日本社会の、従って日本の教育の問題である。そうして、我々のいわゆる「街頭の青年」の問題は、いうまでもなくこの「新しい群集」の線の上に発生する。ここに、我々が「現代日本教育の新しい課題」という大げさな副題を、敢て本稿につけた理由も自から明らかであろう。

(表1) 休日ほどれくらいあるか

有無 地区	あ り			な し	一週間に 一回以上 あ	無応答	
	定 期	不定期	小 計				
F	男	76.9	17.1	94.0	5.9	65.4	22.8
	女	77.8	16.7	94.5	5.5	68.5	38.6
K	男	31.0	18.3	49.3	50.7	30.7	36.8
	女	23.4	23.4	46.8	53.2	32.8	50.9
I							

- Fは神戸市内長田区の下町にある某校区、被調査人員2750人
Kは同じく垂水区の某農村地帯 被調査人員384人
Iは兵庫県掛保郡の代表的な6つの地区 被調査人員2362人
- 数字は凡て%“無応答”の%は全被調査者に対するもの。%aはその間の回答者(“無
応答”を除く全被調査者)に対する各項目の%。%bは、各項目間の%。特に記号の
ないのはa、b両者が一致しているもの。

(表2) その休日をどう

地区	順位	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10										
		項目	映 画	読 書	ラヂオ	休 息	スポー ツ	散 歩	将 棋	音 楽	訪 問	家 事
F	男	%a	60.2	55.3	43.8	40.8	33.4	32.2	20.7	20.7	20.3	15.4
		%b	16.2	13.7	10.8	10.1	8.3	8.0	5.1	5.1	5.0	3.8
	女	項目	家 事	映 画	読 書	休 息	ラヂオ	訪 問	散 歩	音 楽	芝 居	スポー ツ
		%a	55.5	46.9	46.0	34.4	27.4	21.4	19.0	16.9	7.0	5.6
		%b	18.6	16.0	15.3	11.5	9.1	7.1	6.4	5.8	2.4	1.8
K	男	項目	ラヂオ	映 画	休 息	読 書	スポー ツ	パチン コ	家 事	散 歩	音 楽	将 棋
		%a	65.7	61.5	49.4	48.8	46.8	33.1	25.9	18.1	16.9	12.0
		%b	15.1	14.7	11.4	11.2	10.5	7.6	6.0	4.1	3.9	2.8
	女	項目	家 事	読 書	ラヂオ	休 息	映 画	訪 問	散 歩	音 楽	ビクニ ック	スポー ツ
%a		63.0	52.8	38.6	37.8	35.4	20.5	17.3	10.2	4.7	1.6	
		%b	22.0	18.4	13.5	13.2	12.4	7.1	6.0	3.9	1.6	0.6
I	男女 平均	項目	家 事	読 書	ラヂオ	映 画	休 息	スポー ツ	散 歩	訪 問	芝 居	音 楽
		%b	18.6	14.0	12.5	12.0	11.7	8.0	5.2	4.7	3.5	3.5

すぐず時間の多いものから5つほど項目をあげさせ整理した。

さて、我々はさきに、いっさいの青年は学生たると職場人たるとを問わず、「時に」[「街頭の青年」]になるといった。この「時に」が、具体的には彼等のもつ余暇、休暇ないし自由時間に、かたく結びついていることはいうまでもない。一般に、現代の市民生活における余暇ないし自由時間の問題は、極めて重要な意味をもっている。というのは、周知の如く、万人を個性ある人間として尊重する民主主義的な原則は、余暇を作ることを可能にする機械文明によって、はじめてその現実的な地盤が与えられたからである。ところが、現代ではそのいわゆる「機械の生み出した自由時間」が、民主主義の基礎としての個性ある人間ではなくして、「新しい群集」を、「街頭の青年」を生み出しつつある所にこそ、問題があるというべきなのである。では、具体的にいって、現代青年は如何なる余暇、休暇をもち、またそれを如何に利用し、如何利用しているか。

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	無 応 答
ピクニック	パチンコ	図書館	ダンス	芝居	ゲーム	麻雀	講演会	けいりん	つり	その他	
13.6	9.5	6.5	5.8	4.3	4.3	3.2	2.6	2.6	1.1	2.5	4.2
3.4	2.4	1.6	1.4	1.1	1.1	0.8	0.6	0.6	0.3	0.6	
ピクニック	ダンス	図書館	パチンコ	講演会	洋裁	その他					
5.6	4.8	2.4	1.1	1.1	0.9	3.1					5.8
1.8	1.6	0.8	0.4	0.4	0.3	1.0					
ダンス	訪問	講演会	ゲーム	図書館	ピクニック	けいりん	麻雀	芝居	つり		
10.8	9.0	6.0	4.8	4.4	4.2	3.6	3.0	3.0	1.0		20.5
2.5	2.1	1.4	1.2	1.1	1.0	0.8	0.7	0.7	0.2		
芝居	パチンコ	けいりん	図書館								
0.8	0.8	0.8	0.8								19.1
0.3	0.3	0.3	0.3								
ピクニック	講演会	将棋	図書館	パチンコ	ダンス	麻雀	Zゲーム	けいりん			
0.9	0.9	0.9	0.8	0.8	0.6	0.3	0.3	0.14			

何なる程度にいわゆる「街頭の青年」になっているであろうか。一例として、少し古いが、我々が1952年4～5月の間に、神戸市並にその周辺の〈F〉、〈K〉、〈I〉なる三つの地区の満15～25才の一般青年男女、総計5,496人について調べた結果をあげれば、表(1)～(4)の如くである。一見して明らかかなことは都市と郡部、農村の相違により、若干の程度の差はあるにしても、彼等が割合多くの自由時間を有しているということであるが、しかも、その利用状況が主として、マス・コミュニケーションの提供する安価な商業的娯楽物に捧げられていることは、表(2)と(4)において、高位に集中しているものが、ラジオ、映画、読書等であることによっても明らかであり、さらにそれらのものの具体的な内容分析が、一層明瞭に示している所である。その内容分析の一部については、後にもふれるが、これらの表からだけでも、彼等が割合に恵まれた自由時間をもつとともに、その時間の多くを我々のいわゆる「街頭の青年」として暮していることが推知されよう。ここに、我々ははしなくも、社会運動家達の努力によって、労働時間は短縮され人々は多くの自由時間を享有し得るようになった。しかし、文化的遺産を享受するために利用される筈であったこの時間を、人々はシェークスピア、ベートーヴェン、カントのためにではなく、マス・コミュニケーションの提供する罪のない娯楽のために用い、その結果、かえって彼等の間に政治的無関心と怠惰をひきおこしているという、アメリカの学者の嘆きを想起せざるを得ない。⁽³⁴⁾ 勿論、彼等は必ずしも現実の街頭や、盛り場に立ってはいない。しかし、娯乐的マス・コミュニケーションが家庭その他の中にもちこんだ、いわば「散在した姿なき盛り場」にいるといえるであろう。かつて、NHK会長古垣鉄郎氏は、NHKが放送開始二六周年を迎えたさいに、これを記念し自祝する出版物の冒頭に序していった。「この間において、ラジオは、或いは全家庭を講演場として知識の美果を贈り、或いは全家庭を劇場として愉楽の泉を導いた」⁽³⁵⁾と。しかし、実際は、NHK二十数年の歴史は、全日本の家庭を「姿なき盛り場」と化して行った歴史なのではないであろうか。

(表3) 余暇(平日の自由につかえる時間)はどれくらいあるか。

有無 区地		あ り			な し	無応答
		4時間以内	4時間以上	小 計		
F	男	49.6	39.0	88.6	10.9	24.0
	女	49.8	33.0	82.8	15.4	38.8
K	男	62.4	12.7	75.1	24.8	24.8
	女	57.0	4.0	61.0	39.0	36.3
I	男女平均			71.4	28.6	39.0

(表4) その余暇をどう利用しているか。

地区		順位	1	2	3	4	5	6	7	8	無応答
		項目	読書	娯楽	休息	スポーツ	雑事	家事	教養	その他	
F	男	% a	77.3	68.1	62.3	31.6	20.6	18.4	18.0	3.7	21.4
		% b	26.2	22.7	20.7	10.5	6.9	6.1	6.0	1.2	
	女	項目	読書	家事	休息	雑事	娯楽	教養	スポーツ	その他	36.3
		% a	76.1	64.3	48.2	46.0	36.8	18.1	6.1	3.4	
		% b	25.3	21.4	16.0	15.3	12.2	6.0	2.0	1.1	
K	男	項目	読書	娯楽	スポーツ	休息	教養	家事	雑事	その他	28.2
		% a	57.3	41.3	38.0	26.6	7.3	7.3	4.0	0.6	
		% b	31.4	22.6	20.8	14.2	4.0	4.0	2.1	0.4	
	女	項目	読書	家事	娯楽	休息	スポーツ	雑事			38.2
% a		63.9	47.4	35.0	25.7	4.1	3.0				
		% b	35.6	26.4	20.0	14.3	2.3	1.7			
I	男女平均	項目	読書	家事	休息	娯楽	スポーツ	雑事	修養	その他	

しかも、娯乐的マス・コミュニケーションが各所に作り出す我々のいわゆる「散在した姿なき盛り場」は民間放送の開始、その人気番組、殊に連続放送劇の映画化、映画ジャーナリズムの横行と大衆化、主題歌レコードの発売、大新聞の娯楽産業化等、極めて多面的なマス・コミュニケーションの協同作業、いわゆる「タイアップ文化」にささえられて、ますますその規模を拡大

しつつある。東京では既に、ラジオを聞きながら勉強する高校生が6～7割にも⁽³⁶⁾のぼるといふ。ここには、ある学者のいう、「騒音の連続性」の中でしか自己の存在を知覚することができず、喧騒の中でしか情緒の安定を保つことのできな⁽³⁷⁾くなつた悲しい「ラジオ人」が、既に見られるというべきであろう。また、最近の兵庫県下におけるある都市の、小学一年～中学三年の子供達を⁽³⁸⁾対象とする調査によれば、彼等の理想の人物の順位は、①力道山、②松島とも子、③中村錦之助、④大友柳太郎、⑤東千代之助、⑥川上哲二、⑦栃錦であるという。ひとは、この子供達の英雄の顔振と順位のうち、さきにあげた娯乐的マス・コミュニケーションのタイアップ文化が、子供達の間に作りあげた「姿なき盛り場」の様相の如何なるものかを知るべきであろう。

更に、ここに重要なことは、この「姿なき盛り場」においては、人間の意識や行動が次第にステロ版的、平均的なものになつて行つて、低い平面において均一化されるということである。例えば、あるアメリカの学者が⁽³⁹⁾、その国の都市文化の特質としてあげている次のような状況は、そのまま我々のいわゆる「姿なき盛り場」のそれであるともいえるであろう。

——「コマーシャルジャズ、連続放送劇、カストリ雑誌、ストリップ、映画等は、都市に住んでいる大衆のイメージや、習慣や、判断の標準や生活目標などを作る。各人はいろいろな点で、これらの文化的な機械の前では平等である。換言すれば、マス・メディアは、テクノロジーそのものと同様に、その影響力や人々に訴える点では、ほとんど普遍的ともいえる力をもっている。つまり、それらは、あらかじめ想定された大衆的情念の公分母、ないしそのための一種の計画表である。……マス・メディアの内容は、今や、アメリカ人の経験、感情、信念、願望等の一種の公分母となつてきている。それらは多岐にわたる物質的、社会的環境をこえて遠く拡がり、若い世代のなかにも深くくいり、同意の世代のずっと前から、即ち、明確な知覚もまだない時代から、人々によって受け入れられている。」云々。

一般に、「ダイヤルは最も遅れた層を把える」というアメリカの諺は、我々

の場合にも、否、いわゆる「恥の文化」と規定され、「内的志向型」を欠く我々の場合にこそ、一層適切にあてはまる。あに、ダイアルのみならず映画も、出版も更には、今や一つの巨大な娯楽産業に化した観のある新聞すらもが、最も遅れた地点において「姿なき盛り場」を設定し、一切の青年を「街頭の青年」化せんとしているのである。例えば、ここでは最早、ある人によって「成長する『国民』の良心⁽⁴⁰⁾」として、最大の期待をよせられた学生と、一般青年との間の区別すら消滅しつつある。これは、例えば最近のある新聞の報⁽⁴¹⁾ずる学生用語の変化、即ち、学生の使う言葉が、「ミギョツミ ミアジャミ ミいうなればミと映画やショウで仕入れて来た三級品に落ちた」という一事によっても窺知されよう。さきにあげた「街頭の青年たち」を論じたこの国の学者は、日本の新しい希望として、従来多く別の世界に住み、相交ることのなかった学生インテリと一般勤労青年が、日々の現実の問題の解決のために、相互にその経験を分かち合い、相提携すべきことを機会ある毎に力説している。そのような高い積極的な意味をもつ両者の提携も、確に多くの地区において芽⁽⁴²⁾ばえているであろうし、我々もまた、その例を知らぬではない。しかし、彼等はその正しい提携の前に、我々のいわゆる「街頭の青年」として、より多く低い消極的な平面において同質化しつつあることこそ、問題とすべきではないであろうか。これ、我々が、「現代日本における教育の新しい課題」として、「街頭の青年」の問題を敢て提起せんとするゆえんである。

以上、我々は本稿にいわゆる「街頭の青年」とは何か、それは如何にして発生し、如何なる意味を現代日本の教育において、もつものであるかについて説明した。これは、現代社会の変化によるもろもろの組織的集団の意図的な教育的機能の変質から発生した青年達であり、いっさいの意図的な教育的機能から切はなされた生活における青年達である。彼等は、家庭、学校、職場から逃れて、現実の街頭に立っているのみならず、膨大な商業的娯楽物、娯乐的マス・コミュニケーションが、家庭その他にもちこんだ「姿なき盛り場」において、日々形成されている。では、その具体的な様相は、如何なる

ものであろうか。我々は次にその実態の一面を素描してみたいと思う。ただ、ここでは、紙数の関係もあるので、数多くの娯楽的マス・コミュニケーションの中、娯楽放送、とりわけ流行歌の問題のみを一例として取あげ、主としてさきにもあげた我々の調査にもとずいて考察してみることにする。

II 「街頭の青年」の實態

— 娯楽放送の問題を中心として —

1

前章において、我々はいわゆる「街頭の青年」の意義を明らかにするとともに、娯楽放送、殊に流行歌の問題を中心として、その実態を究明したき旨を述べた。これは「街頭の青年」の概念を上のように規定する時、我々のいわゆる「姿なき盛り場」は、勿論、娯楽的出版ジャーナリズムその他によっても形成されるであろうが、その形成に最も大きな力を致すものが、娯楽放送であることは明らかであるからであり、しかも、その中心をなすものが実に、流行歌であるように思われるからである。というのは、娯楽面のメディアとしての放送の圧倒的な地位は、例えば表(5)に掲げた最近の調査の数字の明瞭に示す所であり、生活につかれ果てた現代の大衆にとって、単に「手首をまわすだけ」の操作で得られるラジオの娯楽が、大きな比重をも

(表5) 娯楽面で親しみやすいメディア

メディア	%
ラヂオ	58
映画	20
新聞	9
雑誌	9
(不明)	4

電話放送調査
(都内23区の満18才以上の個人5,065人を対象とする。1952.6.19~25)による。

(表6) どれくらいの時間聞くか

有無 地区	聞 く			聞かない	無応答	
	30分以内	30分以上	小 計			
F	男	20.9	66.4	87.3	12.5	19.6
	女	20.3	67.0	87.3	12.7	30.6
K	男	24.9	66.0	90.9	9.0	15.3
	女	21.5	67.4	88.9	11.1	28.0
I						

つのも怪しむに足るまい。この事実は、前掲の我々の調査によれば表（6）と（7）のように示される。即ち、表（6）に明瞭なように全体の90%に近いものが、ラジオの影響下⁽⁴⁴⁾にあり、しかも、多く聞かれるものが娯楽放送に集中していることは表（7）の明示している所である。勿論、表（6）における平均24%に近い、殊に女において30%に近い「無応答」の存在は、放送に対する無関心な態度の表明として注目されねばならない。しかし、無関心であるということは、全然影響を受けないということではない。例えば、この中には、当然「かけっぱなし」で聞いている人の含まれていることが想像される。この聞き方は勿論、放送内容の意味を知り、内容を理解するものではない。彼等は意識せずに、聞いているとあってよい。従って、内容自体としては、多くの影響を聞く人に与えていないかも知れない。しかし、意識せずに聞くということは、聞かないということではなく、従って影響が皆無ということではない。我々はここで、ただ一つの雰囲気として聞かれているにすぎない放送の影響⁽⁴⁵⁾ということに、改めて注意すべきであろう。例えば、民間放送開始以来、必ず何処かで耳にせずにはいられないあの広告放送の、お

（表8） ラジオ広告に注意をひかれるか

注意をひかれる	40%
余り注意をひかれない	60%

前掲電
通放送
調査に
よる

もねりこびる如き声の氾濫は如何。もとより、この声に注意をひかれるかと問えば、表（8）

の数字の示す如く、「余りひかれない」という方が多いであろう。しかし、これらの人におもねりこびる商業主義的な騒音が、現代の日本の家庭の雰囲気を変えつつあることも、否定できない事実であろう。もちろんこの広告宣伝の問題は「広告や宣伝は個人にへつらい、彼をいかにも重大な存在であるかのように見立てて、彼の批判的精神や洞察力に訴えるかのようによそおってはいる。しかし、これらの仮面は、本質的に個人の批判力をにぶらし、判断の個性を馬鹿にするやり方である。」「実際、批判的な思考能力を鈍化させるこのような方法は、我々のデモクラシーにとって、多々の明らさまな攻撃よりもはるかに危険である。」⁽⁴⁶⁾ というある社会心理学者の重大な警告に顧りみ

(表7) どんな番組を

地区		順位	1	2	3	4	5	6	7
F	男	項目	ニュース	歌謡曲	スポーツ放送	ヨセ演芸	時事解説	クイズ	洋楽
		% a	76.7	68.3	55.4	45.2	39.8	32.6	28.6
		% b	16.7	14.9	12.0	9.9	8.7	7.1	6.2
	女	項目	歌謡曲	ニュース	ヨセ演芸	物語	洋楽	クイズ	時事解説
		% a	70.8	70.0	36.2	36.0	32.1	30.9	27.2
		% b	17.0	16.9	8.8	8.7	7.8	7.4	6.6
K	男	項目	ニュース	歌謡曲	スポーツ放送	浪曲	ヨセ演芸	時事解説	物語
		% a	92.5	76.2	53.0	50.6	43.6	40.1	27.9
		% b	18.6	15.4	10.8	10.3	9.0	8.2	5.9
	女	項目	歌謡曲	ニュース	浪曲	ヨセ演芸	クイズ	物語	時事解説
		% a	68.4	66.4	36.9	32.9	30.9	27.5	25.5
		% b	18.4	17.4	9.6	8.6	8.2	7.2	6.7
I 男女平均	項目	ニュース	歌謡曲	ヨセ演芸	スポーツ放送	浪曲	時事解説	物語	
	% b	18.5	17.3	9.4	9.0	9.0	8.6	5.7	

るとき、問題はさらに、深刻な様相をおびて来るであろう。しかし、問題をこの段階に限ってみても、1951年秋以来、これらの広告的騒音が、日本の家庭と社会の空気を街頭化し、盛り場的なものに変じつつあることは、我々が日々の生活の体験的事実として実感している所ではないか。この意味で、民間放送の開始と更にそれにつづく、いっさいの家庭をプロレス、相撲の大格闘場とし、流行歌とジャズの競演場と化するテレビ放送の開始(53年2月)は、広い教育的な見地からまじめに考えられねばなるまい。一般に、人々に回心をせまる力という点では、新聞の活字よりも、ラジオの声の方がすぐれているともいわれる。⁽⁴⁷⁾それは、主としてその親しげな情緒的な声によるものであるろうが、そのような巷に氾濫するラジオの声が、我々の社会の空気を変じつつあるといっても、必ずしも過言ではないであろう。かつて、この国の高名な教育学者(春山作樹)は、放送事業が開始され、ラジオの演芸放送が家庭

聞いているか

8	9	10	11	12	13	14	15	無応答
浪曲	物語	座談会 討論会	劇場中継	社会の窓	教養番組	邦楽	不定	15.1
26.6	22.7	15.3	14.7	14.0	10.2	7.1	4.4	
5.9	4.9	3.3	3.2	3.1	2.2	1.5	0.9	
劇場中継	浪曲	教養番組	座談会 討論会	スポーツ 放送	社会の窓	邦楽	不定	17.4
27.0	19.3	15.9	14.1	13.2	11.3	9.3	4.4	
6.5	4.6	3.8	3.2	3.1	2.9	2.2	1.1	
クイズ	座談会 討論会	社会の窓	劇場中継	洋楽	教養番組	不定		17.6
26.2	23.8	17.4	12.8	10.5	9.9	1.7		
5.5	5.0	3.6	2.9	2.3	2.2	0.4		
劇場中継	社会の窓	座談会 討論会	スポーツ 放送	教養番組	洋楽	邦楽	不定	15.0
19.4	19.4	18.8	12.1	6.7	4.7	2.7	0.7	
5.2	5.2	5.0	3.3	1.9	1.4	0.8	0.2	
座談会 討論会	劇場中継	クイズ	社会の窓	教養番組	洋楽	不定	邦楽	
4.6	4.5	4.2	2.7	2.5	2.1	0.8	0.7	

に入った時、この国における家庭教育の伝統の崩壊を嘆じたという。この学者の嘆息とともに、我々のいわゆる「街頭の青年」の問題が発生したというべきであろう。

次に、表(7)の好んで聞く番組に見られる諸傾向、即ち、地域、男女を通じてニュース、歌謡曲、寄席演芸の圧倒的な人気、時事解説を除けば教養番組、座談会、討論会等の教養方面のものの人気等々は、さきにもふれたように、ラジオが「街頭の青年」を生産する力の大きさを語って余りあるものといえよう。勿論、この「聴かれぬ教養番組」の問題は、この調査の特異な現象ではない。例えば、現在教養番組を主として送っているNHKの第二放送の中、2%以上の聴取率をもつ番組はスポーツ中継を除いては、一週間にわずか8本しかなく、しかも、そのベスト・テンは演芸と音楽放送であって、ここで最も力を入れている筈の教養と社会番組の聴取率は、ほとんどゼ

ロに近いという⁽⁴⁸⁾。勿論、表(7)におけるニュースの占める大きな数字は無視できない。しかし、我々はこの場合も、ニュースそのものが、我々に環境を報知しそれに適応したり、それを、変革したりする手段を考えさせるという本来の意味をはなれて、唯、単なる娯楽としての側面において受とられていることに、思いを致さねばなるまい。尤も、いうまでもないことであるが、彼等も表(9)に示す如く、環境を何によって知るかと問えば、新聞、ラジオと答える所からしても明なようにラジオのニュースは彼等に、その環境を報知していることに間違はない⁽⁴⁹⁾。彼等はニュースを聞き多くのことを知っている。その点で、社会事象に対して無知、無関心であるという意味での、か

(表9) 環境を何によって知るか

地区		順位	1	2	3	4	5	6	7	無 答
		項目	新聞	ラジオ	映画	談話	雑誌	講演	その他	
F	男	項目	新聞	ラジオ	映画	談話	雑誌	講演	その他	8.2
		% a	99.4	67.5	44.6	31.1	31.0	4.7	0.8	
		% b	35.1	23.7	15.9	11.4	11.3	2.1	0.3	
	女	項目	新聞	ラジオ	談話	雑誌	映画	講演	その他	13.7
		% a	96.1	88.2	39.5	37.4	35.0	2.0	0.8	
		% b	32.2	29.5	13.2	12.5	11.8	0.8	0.3	
K	男	項目	ラジオ	新聞	談話	雑誌	映画	講演	その他	11.4
		% a	93.0	92.5	36.2	34.6	30.4	5.4	0.5	
		% b	31.5	31.3	12.5	11.8	10.6	2.1	0.2	
	女	項目	新聞	ラジオ	雑誌	談話	映画	講演	その他	14.8
		% a	89.9	85.9	37.0	31.5	30.2	0.6	0.6	
		% b	31.9	30.6	13.8	11.7	10.9	0.3	0.3	
I	男女平均	新聞	ラジオ	雑誌	談話	映画	講演	その他		

多いものから順に5つほど番号をつけさせて整理した

つての教育程度や社会的訓練の極度に未熟な農村婦人に見られる、いわゆる「伝統型無関心」とは、明らかに区別される。しかし、彼等のニュースに対する態度は、第一に極めて消極的受動的であり、その知識は広く浅く断片的

である。また、第二に極めて感情的心理的であって、感覚的刺激による感情的心理的昂奮にすぎないことが多い。例えば、国会乱闘のニュースには慨嘆し、政治の貧困をなげいても、そのよって来る理由については、多く知る所がないという事例は、我々の場合にもあてはまるであろう。最近の事例についていえば、保守合同の行方よりも、職業野球日本シリーズの覇権の行方が気にかかるという態度、それがこのニュースを聞く青年の態度の中に多く含まれている、といってもさまで過言ではないであろう。二人のエース、別所、宅和の対戦に比して面白がられる二人の総務会長三木と大野の決戦！ここでは、マス・コミュニケーションは、政治をも娯楽化することによってその本来の報道機能に、質的変化を来たしている。我々がさきに、ニュースの娯乐的側面における受けとり方といったのはこのような事実であり、これをさきの「伝統型無関心」と区別して、「現代型無関心」と呼ぶ規定の仕方には生産的なものがある。ニュースの量の急激な増大とその質の多様化は、聴取者の関心の焦点を失わせ、健康なニュース選択の機能を麻痺状態におちいらせてゆき、その結果、「聞きながされる」ニュースの量がふえると同時に、「聞きながす」ことが一つの習慣となるという、よく指摘される傾向は我々の場合にもまた、あてはまるであろう。ニュースに対する青年達の態度が、右のような彌次馬的なそれを出ないとすれば、それがもたらす空気がやはり「姿なき盛り場」的なものであることは、明らかであり、そこで彼等は「街頭の青年」と化しているといわざるを得まい。表(7)におけるニュースの数字の大きさに、必ずしも楽観が許されないゆえんである。一般に、現代社会においては、人は「知るためには多すぎ、役に立つためには少なすぎる」ニュースに当惑するといわれる。しかし、真剣にニュースの洪水の前に当惑している青年すら見出し得ないのではないかというのが、この調査における我々のいつわらざる実感であった。

到る所に「姿なき盛り場」を作りだす娯楽放送の内容については、もはや多くをいう必要もあるまい。戦後、姿を消していた浪曲がここ数年再びラジ

オの人気番組として復活し、一人の小ヒットラー清水の次郎長が、暴力行為が飯より好きな無知な連中を次々に子分にし、近隣の群小ヤクザどもを征伐して、次第に勢力をはり、次郎長帝国をきずきあげて行く過程を語る虎造ブローは、バチンコ屋の店さきすらためにさびれるという。浪曲復活の意義については後にもふれるが、今この机辺の静寂をさまたげている隣家のラジオの内容は、巧妙な話術にのせられた柳沢淇園の雲萍雑誌から材をとった講談⁽⁵⁰⁾であり、それはかつて、ある学者によって、日本封建的心情の一つの典型としてあげられた、窃盗^{エン}の冤罪をきせられた浪人が一言の弁明も試みず、一人娘を売って弁償するというとんでもない話である。しかもこれらのものは、それがマス・コミュニケーションの手段としては間接的なものであり、また直接の教育的意図や宣伝喚をもたないだけ、それだけ余計に「放送者が意図すると否とかかわらず、聞き手の青少年の間に無意識的に特定の行動的背景をつくりあげてしまうことになり」⁽⁵¹⁾「今日の映画が服装の流行を手伝うとしたら、ラジオは声と態度の流行を助ける」ことになっていることは、多くの人々によって指摘されている如くである。以上、以って「術頭の青年」が、如何なる雰囲気の中に、如何にして形成されて行くかが窺知されよう。

2

さらに、我々はなお、この表(7)に示された歌謡曲の大きな数字に注目しておきたいと思う。勿論、これはこの時期における全国的な一つの傾向が、この調査でも実証されたにすぎない。例えば、1952年12月、朝日新聞が京阪神三市の大人人口、約260万から800人を抽出して試みた調査においても、最も好んで聞くラジオの番組は20代では、歌謡曲が20%でトップになっている⁽⁵²⁾。また、同じ新聞社の世論調査室が、全国1,650万世帯の中から引き出した6,696世帯とその家族の中、満15才以上のもの19,910人を対象として試みた読書調査によれば⁽⁵³⁾「15才から19才までの若い人が読んでいる雑誌ということになれば、『平凡』が、全く他誌を圧倒して30%という高率であり、」⁽⁵⁴⁾

の『文芸春秋』は7%に過ぎない。従って「若い世代はよく雑誌を読むといつても、その大部分は『平凡』級の読者ということになる」由である。我々が学生とともに試みた貸本屋を利用したの阪神地区における読書調査においてもほぼ同様の結果が得られた。⁽⁵⁴⁾自ら「歌と映画の娯楽雑誌」と銘をうち、常に歌謡アルバム的なものを附録とするこの雑誌が、「最高発部数875,000を誇り、これと対照的な智識層むきの総合雑誌『中央公論』『世界』『改造』の三誌がタバになっても、その三分の一にも及ばない」⁽⁵⁵⁾ 事實は、ある意味で現代日本の教育文化（その後、「改造」は廃刊。「平凡」の発行部数はますます増加し、56年1月号は140万と称せられる）の一特質を示すものといふべく、我々がこと新しく「街頭の青年」の問題を提起しなければならないゆえんでもあろう。かくて、歌謡曲、流行歌はこの時代のある種の青年にとっては、殊に我々のいわゆる「街頭の青年」にとっては、その生活の一部となりつつあったといつても過言ではないかも知れない。では青年は果して如何なる歌をうたい、如何なる歌を好むのであろうか。例によって、その一例として、前掲の我々の調査の一部を紹介しよう。

まず、流行歌が青年にどれくらいたわれているかを知るために、日常口ずさむ流行歌の二、三をあげることを求めた問に対する回答を整理すると表

(表10) 流行歌は青年にどれくらい歌われているか

項 目		地域	
		F	I
a	あげられた歌の全曲数	122曲 1366点	283曲 1527点
b	(a)の中、4~5点以上の支持を得たもの	64曲 1228点	61曲 1205点
c	(b)の中に含まれる映画の主題歌	32曲 50%	31曲 50%
d	(a)の中、3~4点以下の支持しかないもの	58曲 138点	222曲 322点
e	回 答 率	39.1%	33.4%

(10) の如くである。ここで注目されることは (F) において39%、(I) において33%という回答率の一見意外な低さであろうが、この種の質問に対しては、大体実際に行っているものの三分の二程度しか答えない（例えば、「印

象深い映画の題名」をあげることを求めた問には、実際に映画を見ると答えたものの三分の二しか答えない) のが、この調査全体の傾向であり、もしこの類推がこの場合も許されるとすれば、< F > の60%、< I > の50%の青年が流行歌に親しんでいるともいえるであろう。尤も乾孝氏が1948年、家庭婦人、勤労者、教員、学生計136名に対して行つた調査によれば、「約半数以上は流行歌に無関心、あるいはきらい、うたわぬ人がいることがわかつた」⁽⁵⁶⁾ 由であるから、この数字の不当な拡大は誤りであるが、同時にこれを以て、流行歌の青年への影響を軽視するのも危険であろう。

さて、ここにあげられた歌は< F > 122曲、< I > 283曲の多きにのぼり、中にはいわゆる流行歌の範疇に属さないものもないではないが、この中< F > において支持数五点以上を得たもの64曲、同様< I > において支持数4点以上を得たもの61曲につき、比較の便宜上、1949年、南博氏が当時の代表的な流行歌⁽⁵⁷⁾ 61曲 (1945年8月より48年12月までの各レコード会社の売行き最高の流行歌から選択し、更に48年12月から49年5月までのNHKヒット・バラードに3回以上歌われたものを加えたもの) について、試みられた類型化に従って、これを(Ⅰ)感傷的なもの (Ⅱ)頹廢的なもの (Ⅲ)ロマンチックなもの (Ⅳ)楽天的なもの の四つのグループに分類し、この各グループに属するもの数を南氏のそれと比較すれば、表(11)のようになる。すな

(表11) どう変つて来たか

	南氏 <F>	<I>
Ⅰ	29	31
Ⅱ	16	4
Ⅲ	10	21
Ⅳ	6	5

わち、(Ⅰ)と(Ⅳ)にはほとんど差が認められないのに対し、(Ⅱ)は半減し、(Ⅲ)は倍加するという結果を示しているのは特徴的である。これは南氏の調査が一般的なものであるのに対し、我々の調査対象が青年

層に限られていることも一因であろうが、この二つの調査の間に横たわる時代の変化が、これらの数字に深く結びついていることも明らかであろう。また、(Ⅳ)の如く、数字的には同一であっても、内容的には時代の推移を反映して、その本質を異にしているグループもある。従って、これらの点につ

いて簡単な比較分析を試みることは、敗戦以来3年余り、早くも逆コースの
声におびえながらも、まだそれが決定的な様相を呈していなかった時代と、
1949年4月の団体等規制令の公布施行による社会不安の激成が、いわゆる国
鉄三事件（49年7、8月）などと結びついて深刻な様相を呈しつつ、朝鮮事変
（50年6月）、講和条約の締結（51年9月）を経て52年4月の独立へと発展し
て行った時代との間に横たわる「姿なき盛り場」の募田気の相違、その変遷
を窺知する資料ともなり得るであろう。そこで、以下各グループに属する歌
の数字の変化について簡単な考察を試みることにしよう。⁽⁵⁸⁾

（Ⅰ）感傷的なもの。単に歌の数の多いのみならず、男女を通じて高い支
持を得たものがここに集中しているのは、依然センチメンタリズムこそ日本
の流行歌の最大の特色をなすことを示すものであり、またその感傷の本質に
ついて、この二つの調査の間に何等根本的な変化は見られない。前の調査
で南氏が指摘された「別れ」「みれん」「思い出」等が、我々の場合でもその
感傷の最大の要素をなすものであり、また、ただ思い出だけを胸にひめ「心
の窓をとじ、しのび泣く」女（「水色のワルツ」）と、見送る女を慰めながら
つらい涙を笑顔でかくしてふりきって去って行く男（「高原の駅よさようなら」
）が、理想像として描かれている点も同様である。勿論、これはある意
味においては当然でもあろう。すなわち、日本社会の深層そのものが変らな
い限り、青年が依然、この種の歌にひかれ、それがくりかえし生産されて行
くことに不思議はあるまい。我々はむしろ、ここで「いわず語らずに心と
心」といい、「目と目で誓い」（「高原の駅よさようなら」）というこの種の歌
の何気ない一句に、日本社会の前近代的な粘体的な空気が見事に表現されて
いることにこそ驚くべきであろう。南氏と異った点としては、特にこのグル
ープに集中して見られる（＜F＞5曲＜I＞8曲）一少女歌手美空ひばりの
出現であろうが、これについては後にふれよう。

（Ⅱ）頽廢的なもの。（やくざ、マドロスもの）。

ここでこの種の歌が半減し、殊に南氏の場合は、やくざ、マドロスと並ん

でその主要な素材となっていた夜の女を歌ったものが消滅したことは、注目に値しよう。これがいわゆる世の中の落つきによることはいうまでもないが、それは他面、流行歌の世界から「こんな女に誰がした」(映画「肉体の門」主題歌「星の流れに」の各節の末尾くりかえし)なる程度の社会批判すら失われてしまったことを示すものでもあろう。やくざとマドロスを歌う頽廢の本質に到っては、何等の変化も認められない。「どうせ」という自嘲、「所詮」という自棄、それに交錯する「男船乗り、往く道や一つ、雲の切れ間にきらりと光る星がたよりの人生さ」(「玄海ブルース」)の如き変態的な自讃、何れも南氏がその調査において指摘されたものが、そのままの場合にもあてはまるのを見る。

(Ⅲ) ロマンチックなもの。(恋愛謳歌, エキゾティシズム)。ここに、この種のもものが激増していることは顕著な特質であるが、内容的にはやはり二つの調査の間に特別の変化があるわけではない。ただ、「黄色いリボン」を先頭にして多くのアメリカものが見られ、更に「バリの屋根の下」から「ブンガワン・ソロ」の如きジャワの民謡まで見られることが、南氏の調査に見られない特徴といえるであろう。この我々の調査に殊に顕著にあらわれている外国へのロマンチシズムは、この調査当時、この国で見られたマクスやピカソの狂人人気、バリーへバリーへと草木もなびくといわれたいわゆる文化人の間に見られたバリーへの憧れ等に相通ずるものであり、民衆が現実生活の抑圧から逃れんとする空間的な逃避の一種と解さるべく、人はここに単独講和により一応の独立を回復しながら、敗戦直後の国民の夢、平和の呼び声に暗い影がさしはじめ、「平和」が禁句となり、チャタレー発禁事件を契機として思想言論の自由にも再び制限が強化されようとして、多くの人々が現実の重圧にあえいでいた52年当時の世相の反映を看取すべきであろう。また、乾氏が前掲の調査で語る所によれば、被調査者中、「大学生では一割以上の天皇崇拜者がいたが、その愛唱歌は例外なしにアメリカの歌であった」⁽⁵⁹⁾由であるから、外国の歌と逆コース的風潮とは、青年の胸の中で何等矛盾なく結び

ついているのかも知れない。

(IV) 楽天的なもの。(解放感、ナンセンスもの)。この種のもものが最も少いのは、二つの調査とも同様であり、その数も大差はない。しかし、そのオブチズム、解放感の本質に到っては根本的な変化が見られる。その変化は、南氏の場合には、この種のももの主要部分をなしていた「東京ブキウギ」以下のブキものが我々の場合は全く姿をけし、これに代うるに「ヤットン節」以下の節ものが登場して来たという事実によって端的に表現されている。従来の日本の流行歌の伝統とは全く異質のものであり、ある意味では日本流行歌史上はじめて人間性の解放を歌ったともいえるかも知れないブキウギ⁽⁶⁰⁾を以って、流行歌における戦後派の頂点を示すものとすれば、同じ解放感を歌っても余りに日本的でありすぎる節ものの出現は、正に流行歌にも「戦後派以後」の時代が訪ずれたことを告げるものというべきであろう。これが当時いわれた逆コースの進展とその基盤を一にするものであることは言をまたず、従ってこの「ブキから節へ」の移行の事実の中に、我々は単に一流行歌の盛衰以上の意味を見出すべきであろう。事実、作者自らバレ歌と称する強烈なエロチシズムをもった「トンコ節」が、発売当時は余り歓迎されず、その後の逆コースの進展とともに約一年を経た後に大流行を来した事実は、この歌の作者が「唄を書くのは僕等だが、それを広く取あげるのは世相だということ⁽⁶¹⁾を痛感します」という如くであり、正に「歌は世につれ、世は歌につれ」というべきであろう。

最後に、これら四つのグループの歌全体を通じて見られる特色は、表(10)の(c)の示す如く、<F>、<I>ともに全体の約半数に及ぶ映画の主題歌が含まれていることである。これは南氏もいう如く、流行歌と映画との間にその企業体をめぐって複雑な関係の存することを示すものであるが、それに⁽⁶²⁾更にラジオや出版の問題がからみ合い、戦後の娯楽産業のタイアップによる巨大ななぐさみ文化を作りあげる。殊に1951年秋以来の民間放送の開始、さらには一誌を以て立体的な映画館兼放送局の役割をねらっているかの観の

ある「平凡」や「明星」の年毎に増加する発行部数が娯楽産業間のこの種の傾向を強化して行くことは明らかであろう。

ところで、ここにあげられた映画の主題歌の中、実に〈F〉においてその4分の1、〈I〉においてその3分の1のものが、美空ひばりのものであるという事実も、流行歌の逆コースを語るものとして見のがすことはできないであろう。というのは、ここに見られるひばりの歌の多くが（I）のグループに集中し、しかもその多くが意識的に新派悲劇的な子役としての、日本の暗い家族主義の中の子供としての彼女を活用しようとしている事實は、これを証するものというべく、彼女の人気の正体は正に、日ましに強まる逆コースの中であって、依然たるため息と涙とやるせない思いに満ちた前近代的な日本的家族主義の鬱屈気象の象徴としてのものであるとも解することができるからである。このことは、ひばりブームが開始された1950年が池田放言の如く深刻な危機の年であり、民衆はわずかにパチンコ、ストリップ、歌笑の落語にウサをはしら、競輪が空前の繁栄を示したこと。6月の朝鮮事変以降は特需景気が謳歌される一方、レッド・バージの開始と大巾のバージ解除等、世はあげて逆コースをたどり、総合雑誌、評論雑誌の相つぐ廃刊の反面、各地で時代劇映画の盗映が横行し、ついには51年8月、時代劇映画月1本制という制限が解除されるに到った事実。同年5月の新聞用紙の割当徹廃による地方紙の崩壊が、秋から年末にかけての民放の開始による大新聞とラジオの統合と相結んでジャーナリズムの墮落をひきおこして行った事実などを思い合せるとき、容易に諒解されるであろう。

3

以上、我々はいわゆる「姿なき盛り場」を到る所に現出し、青年をして「街頭の青年」たらしめる上に、大きな力をふるうものとして、マス・コミュニケーションにのった流行歌の問題をとりあげ、団体等規制令の公布施行（49年4月）、朝鮮事変（50年6月）、講和条約の締結（51年9月）から独立

(52年4月)に到るまでの、日本社会の曲り角を示すような重大事件を中にはさんで、その前と後との二つの時期の調査について簡単に紹介した。等しく「娑なき盛り場」と呼び「街頭の青年」と称する場合も、それらのものつ、景開きが時代の変遷とともに微妙な変化を示していることが、看取されて興味の深いものがある。ところで独立以来M S A交渉を経て現在に到る、その後の変化は如何。これは、一般的にいて、1952年の調査に見られる諸傾向に、根本的な変化は見られないといえるであろう。というものは、社会の基本的な動向そのものに、根本的な変化が見られない以上、それはむしろ当然のこともあろうが。例えば、最近の新聞の報ずる所によれば、今、最も売れているレコードは、復古的な民謡、お座敷ものの日本調と、ジャズのアメリカ調だとい⁽⁶³⁾う。復古的ないわゆるカブキソングとアメリカ的、ないし国籍不明のジャズが同時に流行しているというのは、もし古い頑固な国粹主義と国際的な享楽色、この二つのものの結合と反撥の間にこそ、植民地の特色のあらわれの一つがあるという常識に仮に従えば、一部で植民地化を云々されている日本の現実の端的な象徴かも知れない。

また、1955年度、戦後最大のヒットを示したカブキソング「お富さん」にしても、我々はそこに、さきあげた日本流行歌の特質が集中的に表現されているのを知るのである。例えば、「諦め」と「せめて」という「未練」がからみあった日本的マゾヒズム、「情かけたが身の運命」という宿命観、義理人情という形に変形された似て非なるヒューマンイズム、社会的な立場で自分達の問題を考えようとしな^い悪しき実存主義、孤立主義等々、いずれも52年当時に色こくにじみ出はじめた色彩の強化といえるであろう。なお、ある人が、これが流行する理由として、「久しぶりだなお富さん……これで一分じやすまされめえ」というセンチメンタリズムとヒロイズム、「愚痴はよそうぜお富さん……せめて今夜は飲んで明かそよ」という刹那的享楽主義、「ついて来る気かお富さん……生命短かく渡る浮世は雨もつらいぞ」という日本的ニヒリズムの四つを指摘して、ここに現在一部の青年に一般に見られる、この四つの

要素が巧みにからみ合されて一つの雰囲気を作っているという時、その雰囲気に近いものこそ、現在のいわゆる「姿なき盛り場」のそれであるといえるかも知れない。さらに、我々は最近の放送における浪花節ブームとの関連において、この歌詞や曲、全体を通じてみられる浪曲調を問題にしておかねばなるまい。もちろん、ある作詞家もいうとおり、元来、「流行歌は音楽よりも浪曲に近いものであり、一般向けのするものは極めて浪曲気分をもりこんだものであるし、人気をあつめている歌手には、音楽的に見て価値のない妙な節まわしをする人が多い」ことは、昔からよく知られた一般的な傾向であろう。しかし、問題は、何故この時代に、放送や流行歌にいわゆる浪花節ブームがあらわれたかということである。徳川時代のいわゆる「賤民」の間に発生した、ある研究家⁽⁶⁴⁾のいみじくも名づけた「悲惨の芸術」が、敗戦後十年近くなってまた復活して来た社会的根拠は何か。この問題を考えるに当って、次の一挿話はある示唆を与えるであろう。戦争中、召集された誠実なインテリが、あの「真空地帯」におけるどうにもこうにもやりきれない、軍隊用語のいわゆる「処置ねえ」状況におかれたとき、それまで格別好きでもなかった浪曲が、急に好きになったという。あの動物的な節まわしで、思いきって下品な声をはりあげて無神経きわまる文句を唸っていると、ピッタリ来て変にいい気持ちで、何かヤケクソみたいな、そのくせその日その日に耐えていく元気みたいなものが生れる。結局、野蛮な場所に耐えて行くためには、こちらも野蛮にならねばならないのか」云々と。デフレの影響がさらに深刻化し、相つぐ疑獄、乱闘国会の下、国民はビキニの死の灰におびやかされながら、年末には自殺者の数2万を突破、正に百人の死亡者中、三人が自殺という結果を来したといわれる1954年当時の世相と思えば、身につまされるものがあるであろう。今もなお、全国一千万の人が同時に聞くという、NHKの「三つの歌」の放送に、一たび「お富さん」が歌われるや、会場を圧してひびく手拍子の音の中にこそ、我々は現在のいわゆる「姿なき盛り場」の雰囲気を知るべきであるかも知れない。

そうして問題は、このような歌が、さらに歌を中心に構成されたヴァラエティ・ショウやクイズが、ラジオ、映画、更にはレコードという三つのマス・メディアを通じて、全国にばらまかれ、到る所にいわゆる「姿なき盛り場」を作りつつあるということであり、そこで多くの青年達が、見えざる「街頭の青年」になりつつあるという事実である。一例をあげれば、労働省・婦人少年局の1950年4～5月の年少労働者 912 名に対する調査のうち、彼等の趣味、娯楽としてあげたものを四位までとれば、読書20.4%、映画17.3%、音楽12.7%、歌謡曲11.2%の順であり、⁽⁶⁶⁾しかも読書が大体、前示の如き「平凡」級のものであるというさきの結論の類推がここにも許されるとすれば、彼等がその勤務以外の生活の多くの時間を、「街頭の青年」として過すべき公算は、極めて大であるというべく、そうしてそこにこそ、現代日本の青年層の人間形成の秘密の一つがあるといえるであろう。そうして、この秘密を正しく解くことこそ、現代日本教育の課題の一つであることは明らかであろう。

III 「街頭の青年」の教育問題

—— その発生のメカニズムと解決の方向 ——

1

前二章において、我々は、現代日本教育の新しい課題として「街頭の青年の意味を明らかにし、その発生を論じ、更に彼等の住む世界の実態の一側面につき素描した。では、これに対し、教育は如何に対処すべきであるか、また対処し得るであろうか。勿論、これは根本的には、現代社会の基本的性格を規定する資本主義と機械主義の特質につながる極めて大きな問題であり、これらの教育的超克ないし利用の問題の詳論の如き、更には、この二つが日本社会のいわゆる前近代性と結びついて生み出す特殊な日本的ゆがみを、如何に教育的に除去すべきであるかの問題を正面から取りあげる如きことは、本稿の範囲をこえるものでもあろう。そこで、ここでは、我々は問題の困難

であり、従って不十分な叙述に終ることを知りつつ、なお、最近我々が経験した二、三の事例を中心として、「街頭の青年」の問題の教育的処理について、考えておきたい。

ところで、我々は、これまでいわゆる「街頭の青年」の姿を余りに暗く描きすぎたかも知れない。ここでは、青年達は、全く受動的な存在として描かれ、マス・コミュニケーションは文明の生み出した悪魔として呪詛されているのみである。これでは、ついには、人間存在に対する絶望感と一種の機械破壊に墮してしまうという非難も聞かれよう。もとより、我々として、現実には、一方における我々のいわゆる「姿なき盛り場」の規模の不断の拡大とともに、このような「なぐさみ文化」、消費的文化の大量放出とそれにもとづく、低い段階への強制的同質化作用にはさまれながら、なお青年達の間に、新しいコミュニケーションの形式が、彼等の健康な関心の方向と質とを伸ばして行くための新しい芽が、見出されることを知らないではない。ここに、新しい芽、新しいコミュニケーションの運動とは、いうまでもなく、青年達の相互信頼と連帯性の自覚の上におこなわれているもろもろのサークル活動などを通じて、「横」のパーソナル・コミュニケーションでなければならない。しかし、それが全体的な傾向としては、なお幾多の障碍に遭合しつつ萌芽的なものとどまっていることも事実であろう。このような「横」のパーソナル・コミュニケーションを欠く所、組織を寸断されたバラバラの孤立し無力化した個人としての青年達の上にか、いわゆる「姿なき盛り場」が発生するというべきであろう。では、彼等の間に、「横」のパーソナル・コミュニケーションを発生させないものの正体は何か、彼等の組織を寸断している原因は何か。いいかえれば、彼等は「何が故に」また「如何にして」「街頭の青年」となるのであるか。以下簡単にその筋道を辿ってみよう。

最近、筆者が数回にわたって語り合う機会をもった、今年二十才のある大工場の養成工はいう。「あのピストルギャングの権善五が、捕えられた時いった言葉、『世の中に信頼できるのは母と金と自分だけだ』というのが、こ

の頃、しみじみと同感されて来ます。一体、私達は誰に頼れるというのでしよう。職場の仲間は、手を握る相手であるよりは、打ち勝つべき競走相手です。みな、それぞれに上役との特別のコネクションをもっています。私だって、同郷の係長さんに特別に目をかけてもらっています。この人がいたから、この職場に入れたといってもいいでしょう。はじめは、私もこの人がせっかくの日曜日でも自宅に私を呼びよせて家の手伝などさせるので、自分は会社にやとわれているのであって、この人に月給をもらっているのではないと、少々癪にさわったこともありました。しかし、今では、大勢の同輩の中から自分だけが自宅に呼んでもらえるという一種の誇り、特権意識のようなものがでてきたことを感じます。何も、いわゆる『立身出世』を望んでいるわけではありませんが、これがないと不安です。勿論、これですべて安心していられるというのではなく、また他の仲間に対して一種のうしろめたい気持ちもありますが。職場で友人との関係が大切か、上役との関係が大切かと問われれば、現実には後者の方が大切であるといわなければなりません。この三月、市の青少年問題協議会でお出しになった『若い人々のために』というパンフレットでは、結論として『手をつなぐ姿勢』というのを強調して『集団による解決』とか、『仲間どおしの話し合い』とかを強調されていますが、私達は横に手をつなぐよりも、縦の関係を大事にせざるを得ないような現状なのではないかと思います。工場一家とか職場の家族主義ということが、今でも時にいわれますが、それは上役との間に親密な関係を作ることに通ずるようです。しかし、これが家族主義というものなのですか。私達は何となく不安であり、つきつめて考えればさきの権善五の言葉について同感したりすることにもなるのです。この不安をごまかすために金のあるときは映画へ行き、ない時は寮のラジオかテレビで我慢することにしていきます」云々。もとより一例にすぎないが「縦」のパーソナル・コミュニケーションの発達の下に、「横」のパーソナル・コミュニケーションが寸断され、青年達が孤立し、ある人のいわゆる「茫漠たる不安」⁽⁶⁷⁾の感覚から娯楽産業の餌食となり、「街頭の青年」化して

行く事情がよく語られているというべきであろう。ある学者⁽⁶⁸⁾は大衆社会において孤立した個人のもつ不安感が、大衆娯楽を要求し、そこにおいて「大衆的忘我状態」(mass ecstasy)が見られることを指摘して「百貨店や工場が映画やダンスホールなどの大衆娯楽によってやしなわれ、その結果、独得の心的習慣を獲得した人々を生み出しているものであり、この心的習慣が、政治面では興奮と集団的恍惚とを伴う大衆会合としてあらわれているのである。高度に進んだ文明の真唯中において我々は、かつて原始的な忘我の宗教に属していた集団的態度を、再び生み出すような段階に到達しつつある」と警告しているが、さきの青年の言葉はこの警告と意思合すとき、一層重要な意味をもつことが判るであろう。娯楽の問題は、ここでは後にも説くように直接に政治や社会の問題につらなって来るのである。

更に、この青年の述懐の中で「縦」のコミュニケーションの強調が家族主義の名の下に理解され、しかもそれに安んじ得ない不安が語られている点は、特に注目に値しよう。というのは、元来、家族主義は権威に対する絶対的服従という「縦」の関係と、共同体的な雰囲気への没入という「横」の関係とを含んでおり、従って「横」のパーソナル・コミュニケーションの欠如ということは、この共同体的な雰囲気への没入を意味し、また家族主義そのものの破綻を意味するからである。自分だけが上役から自宅によばれているのだという如き特権的な意識が共同体的な雰囲気と全く相いれないことは明らかであろう。彼等は「縦」のパーソナル・コミュニケーションに頼りながら、反面、「横」のその欠如のために、とらえ難い不安と虚脱におそわれ、それを消費的な「なぐさみ文化」の中で回復しようと空しい努力をつづける。この努力の空しい理由については後ふれるが、これこそ、いわゆる「姿なき盛り場」「街頭の青年」の発生する基本的なメカニズムというべきであろう。ここに我々は、はしなくも「近代技術の発達した現代における最初の独裁であり」、「ラジオや拡声器を通じて八千万の国民が、その自主独立の思考を奪われた」⁽⁶⁹⁾といわれるヒトラーの思想政策が、マス・コミュニケーションとマ

ス・ミーティングを極度に利用しながら、一方では民衆の「孤立化」政策を併用した事実を想起せざるを得ない。「ファシズムの場合には、マス・ミーティングは極度に利用される反面、公私を問わず、もっと小規模な、懇談的なあるいは討論的な集合はきびしく制限され、また監視されている。さらに一層小規模な会話の世界では『密告』とか『盗聴』とかいう恐怖の手段でコミュニケーションの自然の流れは中断される。ファシズムは人間を人為的に孤立させようとする。⁽⁷⁰⁾「ひとは自分の話している当の相手がだれであるか判らない。自分の親友、自分の子供や親戚が自分に不利なことを密告するかも知れず、レストランで隣のテーブルに坐っている男がノートをとっているかも知らないのだ。」共同の食事、クラブ、教育、およびこれに類する性格をもったあらゆる事柄の禁止……文化的目的をもった団体や、同様の性格を持った集合をすべて禁止すること、一言でいえば、人民の一人一人を相互にできるだけ未知の関係においておくための、あらゆる手段の採用。(もし、相互に知りあえば、それは常に相互の信頼を生み出しかねないからである)⁽⁷¹⁾』といわれるように、ヒトラーがまず人間を孤独にしておいて、それをマス・コミュニケーションとマス・ミーティングで回復させようとする二重の手のこんだ方法を使用したことは、周知の如くであるが、意図されていると否とを問わず、類似したメカニズムが、いわゆる「街頭の青年」の発生の底に作用していることは明らかであろう。

2

以上、我々は青年が「街頭化」し、「姿なき盛り場」の住民になるメカニズムを辿り、その原因を明らかにした。要するに、それは、青年達が分散し、孤立化し、そのために無力化しているということにあるものようである。彼等は、職場で一個の部分品として働かせられるのみならず、消費的「なぐさみ」文化にその全体性の回復を求めて、再び、ここで部分品化される。というのは、ここでは彼等がどんな問題をもっていようと、どんな苦しみがあ

ろうと、それはすべて捨象されて純粹に娛樂だけを求めている一種の部分品的存在として現れるからである。彼等は職場で部分品であったのと、別の意味で再び部分品になる。「なぐさみ文化」は、人間の全体性を回復するよう見えながら、実は再び、これを部分品化し、彼等を孤立させ、分散させ、無力化させる。ここに青年達の「街頭化」がはじまり、「姿なき盛り場」が成立する。かくては、これに対処する基本的な方策はおのずから明らかであろう。それは、職場においてのみならず、消費生活においてすら、孤立し、分散し、無力化して一個の部分品と化している青年達の間、彼等の全体性を回復せしめるような、相互信頼と連帯性の自覚にもとずいた「横」のパーソナル・コミュニケーションの組織を作り、ひろげて行くこと以外にはあり得ない。しかし、それは如何にして可能であろうか。

いや、その前に、我々は青年達の間、逆にその街頭化を助けるような似て非なるパーソナル・コミュニケーションの組織の存在することに注目しておかねばなるまい。その代表的なもの一例としては、例えば「平凡」、「明星」などの「友の会」システムのもつ組織などがあげられるであろう。それは、さきあげた映画俳優などにその例を見る如きマス・コミュニケーションの育てた青年の英雄達の「後援会」という古めかしい形の組織とも結びつき、更に連続放送劇の映画化などを通じて、ラジオともタイアップして甚だ多面的なマス・コミュニケーションの協応動作によって青年達の間「街頭的」雰囲気をつくりあげて行く。しかし、我々はこの種の組織をすら利用して、これを新しい相互信頼と連帯性の組織にすることも決して不可能ではない。現にある⁽⁷²⁾学生は、「知識人や学生は、ラジオから流れてくる流行歌だの、お涙頂戴映画だの、書店の店頭並んでいる娛樂雑誌だのを、低級な、卑俗なものだといつて非難します。その非難のかけには、自分達の方が、美空ひばりのファンより優等生だという考えがひそんでいます。しかし、日本人がみんな手を取りあって生きてゆくためには、この非難こそ非難さるべきではないでしょうか」という見地から、「平凡」の愛読者達との文通を通じて、一

見ミーハ族に見える人達でも、着実に考えるキッカケを作ってゆけば、生活の現実を分析し、発言するようになることを、実践のなかから実証した。彼は、僅か38字の短文が一度、「平凡」の「お便り交換室」の欄にのってから、数カ月の間に、約1,150人程の青年からの手紙が、「あらゆる県から、しかも沖縄や遠く海を渡ってブラジルからまでもやって来たのには、全く驚くほかはなく、今更のように『平凡』に対する認識を新たに致しました」とのべ、またその手紙のどれもが「表現はちがっていても、恵まれない環境に打ち勝ち、向上しようとする意欲に満ちているのには、びっくりもし、嬉しくも感じ、また『平凡』を読んでいるというだけで、大きな親密感を生み、知らない人やまた異性に対して、容易に便りの書けるということは、今までの日本にない、新しい連帯意識の芽でもあるように思えました」と書いている。まさに、新しいパーソナル・コミュニケーションの成立の一つの可能性を示したものであるべく、この学生の『『平凡』』などという雑誌の陰で何千何万という人が文通を続けているという事は、『平凡』が数百万の人に読まれると同様に大切なことであり、かりに僅かでも私達が、その中に新しい意図と真面目な態度を以て加わるということは、決して無意義な事とは思われません」という言葉に誤りはあるまい。勿論、その総数約140万と称せられる『平凡』の発行部数に比べれば、その規模はいうに足りないかも知れないが、これが新しい前進の一步を意味するものであることは明らかであろう。

もとより、新しい前進を意味するものはこれにとどまらない。ひとは、当然、ここにその最大なるものの一として、この二、三年めざましい発展を示し、「いまでは全国に歌声のおこらないところはほとんどなくなった」といわれ、そのために昨年は流行歌のレコードの売れ行きが、例年になく低下したといわれる「歌ごえ運動」を想起すべきであろう。この運動の関係者の一人⁽⁷³⁾の説明によれば、「歌ごえ運動の強味は、生活の場所そのもののなかで生活と歌が結びついていること、誰でもすぐいっしょに歌える、つまり万人に扉があけ放たれているところにある。」「だから歌ごえは、おなじく生活の場から、

よりよい生活をめざしておこった組合運動や青年婦人運動などと必然的に結びついて発展して来た」。「しかし、歌ごえがほんとうに「誰でもはいて歌える」歌ごえになりだしたのは、昨年からだといってよい。そのきっかけを作ったのが「しあわせの歌」であり、この歌以来、「昨春から全国的に大衆創作歌曲があらわれはじめた」由であるが、これはまた奈良、蟻の会合唱団の⁽⁷⁴⁾一会員によって、次のように語られている。「私たちは長いこと一人々々でした。そして、みんな力になり合える仲間を探していました。街も学校も職場も暗いことが多すぎました。一人ではとても切りぬけていけない暗さでした。『せめて歌でも——』三年前数人で始めたコーラスが、三ヶ月で百人の大合唱になったのも、この暗さに打ち克つものをみんなが求めていたからです。」ともあれ、仲間とともにうたう楽しさにくらぶれば、流行歌をうたう面白さの極めて貧弱であることは明らかであり、仲間とともに歌う楽しさを知ったひとびとが卑俗な流行歌とちがったものを必要とすることは当然であって、ここに流行歌による青年の「街頭化」に対する有効な抵抗の礎石がおかれたというべきであろう。

しかし、もとより問題がすべてこれで解決されるのではないし、また歌ごえ運動そのものに全く問題がないわけではない。ある人もいうように、「世界に比をみないうたごえ運動の成功は」⁽⁷⁵⁾例えば「原爆を許すまじ」という語感が「かえり見はせじ」というのと同じ意識においてうけとられるような、「私達の心情の前近代的部分とのふれあい」で、そのことが逆に大衆によって支持される結果をもったので」あるかも知れないし、また「ソ同盟の歌をうたうことがある意味でたたかいからの逃避であり、その意識の根で、民謡、浪花節のタイハイと結びついている事実はないか。また、出征兵士を送るきぶんでひそかな敵意を語っていないか。厭戦的な人道的なためいきばかりをもらしていないか。平和を鳩とまちがえていないか。そうして突然ヒーロイックな気分になったりすることが不思議でないかどうか。」という反省も必要であろう。たしかに、歌詞の問題一つをとってみても、最もよく歌われているも

のに等しく見られるように、その歌詞がただ「希望観測的な象徴言語にみち、若さをただ直情へと誘うのなら、マンボリズムの思考停止性や、月、涙、港を繰返す流行歌と大差ないとさえ極言⁽⁷⁶⁾できる」かも知れない。そうして、このような反省によつてのみ、この運動は更に堅実な発展をとげ得るであろう。さきにひいたこの運動の反省を説いた人も「批評はうたごえ運動そのものの内部からも起つてきている」となし、「うたごえ新聞」(1955.9.15)の「うたごえがこんなに広まっていながら、一方活気がないのは、メロディをおぼえるという形のうたごえ運動は限界にきているのではないか、このうたごえのひろまりのなかで、単なるメロディとしてうたを歌うのではなく、思想をあらわしているものとして、うたをうたわねばならないのではないか、そのためには技術も高めねばならない。あるいはまた職場では『青年歌集』の歌はまだ理窟っぽいのが多いといっているが、うたう会の人々が流行歌をうたっている仲間に『流行歌なんて、涙と月と霧と波止場ばかりじゃないか』というのと、口惜しがって『青年歌集の歌は平和と団結と若者と鳩ばかりじゃないか』といったが、これはよく反省してみなければならぬ」という記事をひいて、「これらの反省はなにを意味しているであろうか、うたごえ運動がうたう楽しみだけでなく、さらに一歩進んで表現への要求をもちはじめたこと、もうひとつは、うたごえ運動の歌の類型性に対する反省を意味しているであろう。もんだいは現在の詩サークルが直面しているもんだい、あるいはまた生活記録のサークルが直面しているもんだいと本質的にちがいはないのだ。自己表現の要求が素朴な段階で満足をえられているあいだは、こうした要求はおきないし、壁も意識されない。しかし、運動が運動である以上は、つねにその内部から現状破壊的要素が芽生え、これが運動を前進にみちびくのだ」と説いているのは、全く正しいといわねばなるまい。

殊に、ここに歌ごえ運動の直面している問題が、詩や生活記録のサークルが直面しているものと本質的に同じものとしてとりあげられているのは興味深いものがある。まことに歌ごえ運動によって、全国的に展開されている膚

と膚とをふれ合せるようなパーソナル・コミュニケーションを、一時的感覚的な解放感、素朴な自己表現の段階に終らせることなく、詩や生活記録その他もろもろのサークル活動との連携によって、いっさいのマス・コミュニケーションや縦のパーソナル・コミュニケーションに対抗し得る横のパーソナル・コミュニケーションにまで成長せしめることこそ、根本的に「街頭の青年」を解消せしめる方策というべきであろう。この歌と詩のサークルの連携(77)に関し、ある詩人のいっている次の言葉は、甚だ示唆に富んでいる。「詩の書き手がふえて来て、それは一つのサークル活動にまで発展しているが、私の知っている範囲では、どこへ行っても、この詩や文学のサークルと、そしてあの『青年歌集』に収められてあるような歌の合唱をやって楽しんでいるグループとは、しっかりと結びつかず、割れている場合が多い。歌ごえをやってる人々には、詩や文学のサークルの人たちの書いている詩などさっぱり面白くないし、また、文学サークルの連中には、歌ばかり歌っている奴は何だかお目出度く見えるというような事情が実際にある。これはどう考えても正常な状態とはいえない。……

俺たちは笑うことを知っている

泣くことを知っている

何よりも一番書くことを知っている

これは『青年歌集』にある歌の一節だ。この三つの言葉の中で、特に重要な意味をもつものは、最後の『何よりも一番書くことを知っている』という言葉だと思う。書くことを知っているというのは、いいかえると、われわれはものを批判する力をもっているということである。私たちの詩は、ただ笑うことを知り、泣くことを知っている人間の歌であるにとどまらず、なぜおかしいか、なぜ悲しいかというその笑いや涙のおくにひそんでいる社会的な要因とたえず身をもって対決している人間の歌でなければならない。

歌ごえ、もとより結構だけれど、ただコーラスだけでは物ごとを科学的に見きわめてゆく力はつかない。現代詩の成立から私たちが学びとるべき最も

かんじんな事からは、詩を書くという行為が、笑いや涙の性質を、一定の社会的状況の下でたしかめ批判するというかんけいになっているかどうかだ。これまでの歌には、この自覚が欠けている。ただ笑いたいから笑い、泣きたいから泣くという流儀の歌であった。

今日の日本の置かれている状況を思うとき、その状況と人間との対決が、ただ笑いたいから笑い、泣きたいから泣くでは困るだろう。そこに批評の耳を働かせている詩である現代詩に、あえて歌のかたちを与えようというのが、今年の私の夢だ」云々。長々と引用したのは、ここに、さきにもいうように、本質的に同質の問題に直面しながら、分離しているサークル活動の連携に関し、基本的な提言があると信じたからであるが、また一面、自分の「笑いや涙の性質を、一定の社会的状況の下でたしかめ批判する」ということは、涙と月と霧と波止場の流行歌にとじこもっている青年達を、「街頭」から脱せしめる方法でもあろう。これについては、我々にも一つの古い思い出がある。

1953年春、トンコ節全盛の頃、地方のある新聞は、トンコ節絶対排撃を決議した某村青年団の会合が、二次会に移り酒がでるなり一せいにトンコ節の合唱となってしまったという事実を、地方農村の表情として面白おかしく伝えた。当時、県下各地の農村青年と語り合う機会をもっていたのを幸い、ある村でこの記事を取りあげて青年達の意見をきいてみると、ほとんどすべての青年が、「ありそうなことだ。その気持は実によく判る」という。そこで「何故こんなものを歌うか。その判るという気持は何か」と重ねて反問したところ、今度は多く黙りこんでしまった青年の間から一人が立あがっている。「我々は他にいい歌がないから、これを歌うのではない。我々とても、もっと高尚ないわゆるいい歌を知らぬではない。しかし、現在の我々の気持にこれほどぴったりくるものが他にあるか。『私しや畑の芋娘、首をふりふり子ができた』という歌詞の合唱が、いつの間にか『首をふりふり再軍備』となる所にこそ、現在の我々のモヤモヤした胸の鬱積した気持のはけ口がある。いわば、これは我々の許された唯一のはかなきレジスタンスである」と。そ

れに対して、我々は答えた。「それは決してレジスタンスの名に値するものでもなんでもない。それはいわば徳川時代の狂歌、落首の類にすぎない。かりそめにも民主主義が説かれ、言論の自由の原則が曲りなりにもいわれる現代、青年がそのような落首的精神に生きていとすれば、どこに社会の希望が認められるか。いたずらなるヤユと自嘲の下に、私達が政治や社会について自己の責任として真剣に考える習慣を失うことのこわさを思え。いたずらなる諷刺にうち興じていれば、その諷刺すら許されなくなる時代が来ることは歴史が証明しているではないか」と。この意味で、別の機会にもふれたが⁽⁷⁸⁾マス・コミュニケーションにおける最近の「諷刺」の流行は、一つの危険な傾向を示すというべく、現在、人気を博しつつ横行している各紙の諷刺欄やラジオの諷刺番組が戦後のどの時代に開始され、盛大になって行ったか、その社会的影響如何という問題は、まじめに考えてみる必要がある。これにくらぶれば、「歌ごえ運動」の何と、健全な、逞しさであろう。しかし、それはともあれ、この段階においても、かえ歌がうたわれ、しかもそれが一つのレジスタンスであると感じられていることは、一つの進歩であり、ここに新しい芽を育てるべき一つの契機のあることも事実であろう。というのは、かえ歌によって自ら慰めている青年達をもこの事実の上に立って、歌うことによってわずかに慰められている胸のモヤモヤの正体を、その「笑いや涙の性質を、一定の社会的状況の下でたしかめ、批判」させることによって（それには、例えばさきにあげた程度の流行歌の分析さえ若干の役には立つであろう）、逆に落首的精神から脱出せしめることも可能であろうから。その可能性は、部分的にはあるが、さきにあげた一学生によって、「平凡」の読者について実証されている。

いわゆる「街頭の青年」は、非難され軽蔑される前に、まず彼等を「街頭の青年」にならしめているものの正体、存在理由を徹底的に探究し、分析する機会が与えられ、そのための場が提供されねばなるまい。勿論、この場合、その探求と分析は、かかる娯楽的コミュニケーションが存在し歓迎される社

会的、政治的、経済的な情勢、世界の動き、それをささえる根本的な社会体制自体への身についた批判と、そこにおける彼等自身の日々の行動への反省につながるものでなければならない。そうして、そのような批判と反省が、さまざまなサークル活動において最も効果的になされ、またそれがとりもなおさず、さきの相互信頼と連帯性の自覚の上にきずかれる「横」のパーソナル・コミュニケーションの形成と表裏一体をなすものであることは明らかであろう。問題は、俗悪な娯楽的マス・コミュニケーションの存在することではなくて、青年達が、その存在の真の意味を知らず、従って、それに対抗する組織をもたないということであろう。「街頭の青年」達に、その意味を究明させ、それに対抗する組織を作らせることはもとより極めて困難なことでもであろう。しかし、教育がある意味において、現代社会の病理に挑むものでなければならないとすれば、このような困難な努力が、現代の教育の重要な部分を占めねばならないことにもなる。ここに、我々はあるイギリスの⁽⁷⁹⁾学者が、現代の教育の任務の一として、常に事実との対比において「新聞の読み方が教えられねばならない」というのと同様の意味において、一切の娯楽的マス・コミュニケーションに対処する方法が教えられねばならないといわねばなるまい。これはもとより、例えば、ラジオの例でいえば、ためになる教養放送のみを聞かせて、娯楽番組を聞かせないということではない。また娯楽放送中のうちからいわゆるよい番組と悪い番組を選択して聞かせるということでもない。それは、俗悪な娯楽番組をも、一つの組織の中で受け取り、その存在理由を探り、それに自分達がひかれる原因をお互に反省し合うことによって、娯楽放送の影響をよきものに変ずるとともに、それによってパーソナル・コミュニケーションを作りあげ、各自がゆるぎなき社会認識に到達することである。現に、和歌山県のある村の青年学級では、俗悪放送の標本のようにいわれたラジオ・ドラマ「君の名」を学級という組織の場で聞くことによって、その身近なテーマによる話し合いの活潑化をはかるとともに、逆にその受け取り方そのものも変化させることに成功した例が報告され、

また浪花節をみんなで聞いて議論している間に、その聞き方も変って来たといわれる。⁽⁸⁰⁾

これらの事実は「街頭の青年」の問題を考えるに当って、我々を力づけ、勇気づけてくれる。要は、青年達がどのような警戒心のなかで、どのような組織を以て、どのような批判的な姿勢で、マス・メディアに接触し、その放出する「なぐさみ文化」に対しているかということである。このような批判的な態度につらぬかれたマス・コミュニケーションの受けとり態勢が、青年達の間、更に大人や子供達の間組織されてゆくとき、本来、民衆の生活の間に創り出されたものでありながら、現代は大資本の製作物として、政治的にも社会的にも思想的にも、民衆の正しい持続的な関心をにぶらせる作用をしている「娯楽」は、再び民衆の手にとりもどされることとなるべく、この時こそ、いわゆる「街頭の青年」の問題も根本的な解決を見ることができらるであろう。現代、「娯楽」の問題は、多く第一義的な問題としてはとりあつかわれ⁽⁸¹⁾ない。しかしある人もいうように「娯楽がそういう二流のものとして取扱れているということは、けっして二流の問題ではない。娯楽は人間が楽しく生きようという創意にかかわり、正しくは文化の問題である。」我々はさきに、「街頭の青年」の発生するメカニズムとして、青年達が職場においてのみならず、娯楽面において、また部分品化され、分散され、孤立していることを述べた。娯乐的マス・コミュニケーションの受け取り面の組織化は、この点において、「街頭の青年」の発生を防ぐであろう。この意味において、機械時代における人間回復運動として、労働以外の面での新しい人間関係の創造運動としての真の意味におけるレクリエーション活動はの発展がまた、⁽⁸²⁾「街頭の青年」の問題の解決に根本的な寄与を果すことであろう。

このことは、到る所に「姿なき盛り場」を作り出し、「街頭の青年」を生み出す、巨大な娯乐的マス・コミュニケーションに対抗する方策が、実は青年の側、自体にあることをあらわすとともに、昨年（1955年）夏、兵庫県警の保安当局の動きを中心に、全国的な話題となった「県条令」等の制定による

「有害不良文化財の規制」いわゆる環境浄化への努力が、この問題に関する限り、多くの効果をもち得ないことを語っている。青年達は、既に娯楽産業資本家に対して「鬼の目にも涙」的な反省を期待したり、いかがわしいものを、お上にお願してとりしまっていただく段階をこえて、遅しい前進を示していなければなるまい。従って、この「少年（満6才以上18才未満）の社会環境の浄化を妨げるおそれある有害不良文化財を規制することを目的とする」という「有害不良文化財の規制に関する条例」が、「警察国家への復帰を誤解せしめるだけでなく、社会教育に対する侮辱をさへ感じとられる⁽⁸³⁾」ものとして、世論の前に葬りさらられていったことも当然であろう。

3

以上、極めて大ざっぱにはあるが、「姿なき盛り場」における「街頭の青年」の問題に対処すべき、基本的な方向と対策を一瞥した。今や、全国的なひろがりを見せつつある「歌ごえ運動」「生活記録」その他さまざまな青年達の間におけるサークル活動の発展は、この対策が基本的な線においてすでに具体化しつつあることを示すともいえるであろう。勿論、それらの活動は、さきにもふれたようにその内部にさまざまな問題を含んではいらぬ。マス・コミュニケーションの影響力を屈折させる力が、青年の側にあることは明らかであるが、これを過大評価することは、過少評価と同様に危険である。例えば、生活記録のサークルが、その記録を、マス・コミュニケーションにとりあげられることによって、生活記録そのものの目的や自覚があいまいになり、単に新しい型の文学青年を作り出す結果となる如き、ミイラとりが逆にマス・コミュニケーションによってミイラにされるような傾向もないではない。殊に、度々ふれたように「恥の文化」といわれ、一般的な「国民の社会心理の土台」として「寄りかか⁽⁸⁴⁾りの心理」が指摘されるこの国において、この点は特に戒心を要すべきことであろう。数多くの外国の事例、例えば、新聞の六割の支持を得ていた保守党が労働党にやぶれさった1945年のイギリスの総

選挙、新聞ラジオのおよそ七、八割の支持を得たデューイが、トルーマンにやぶれた1948年のアメリカの大統領選挙の結果等をあげて、マス・コミュニケーションの力が決して万能でないことに安心する前に、我々は、この国において、真にこれらに比さるべき事実のいまだかつて一度もなかったことを（投票のいわゆる「ナダレ現象」や、マス・コミュニケーションが自ら作りあげたいわゆる「大番くるわせ」はあっても）反省すべきであるかも知れない。

しかし、それにもかかわらず、「姿なき盛り場」と「街頭の青年」の問題の解決が、マス・コミュニケーションの企業体に、「健全なよい」ものを提供することを懇願したり、官憲に、その「取締り」をお願いしたりする方向ではなく、青年達自身の組織によるマス・コミュニケーションの影響力の屈折、悪しきものを褒じてよきものとする努力、例えば、新しい愚民政策をおもわせるようなかかる俗悪なマス・コミュニケーションが何故存在するかの存在理由の探求を通じて、ゆるぎなき社会認識に到達し、それを通じて更に相互の組織を強固にし、相互信頼に基づくパーソナル・コミュニケーションを強化拡大して行く過程のうちに達成されて行くことは明らかであろう。我々は、さきあげた「有害不良文化財の規制に関する条例」が世間をさわがせたとき、「そういう古い世代の考え方こそ、不良文化財の最たるものである。新しい愚民政策には、我々が組織によって賢明になることによって、我々の手で対抗し処理する」と我々に語った青年の言葉と努力に期待したい。そうして、青年達の間に、このような組織への芽を育て努力への目を開き、彼等が自ら「街頭の青年」たることを脱し、「姿なき盛り場」を解消して行く過程に協力して行くことが、現代青年教育の課題であることは明らかであろう。それはまた、現代社会の病理に、教育の面から根本的に挑もうとする努力でもある。

(56・3.31)

註(1) 清水幾太郎「街頭の青年たち」(世界)1946年2月号)参照。

(2) 「そういう子供は、もう浮浪児とはいわない。街頭見っというんだってさ」大岡昇平「化粧」(「朝日新聞」1952年2月22日)

(3) L. Wirth, Consensus and Mass Communication, in Mass Communications, ed. by W.

- Schramm, 1949, p. 523.
- (4) K. Young, *Handbook of Social Psychology*, 1946, pp. 5~6.
 - (5) *Ibid.*, p. 58.
 - (6) B. Russell, *On Education*, 1926, p. 16.
 - (7) L. White, *The American Radio*, 1947 参照。
 - (8) 日高六郎編,「マス・コミュニケーション講座」第5巻, 290頁。
 - (9) 座談会「銀座と浅草のティーンエイジャー」における浅草の軽演劇俳優森八郎氏の発言「中央公論」1956年2月号。
 - (10) 全国小, 中学校から65校を抽出。調査児童数11,775名。NHK放送文化研究所, 布留武郎氏の第3回日本教育社会学会報告資料による。
 - (11) 調査対象は, 秋田県, 東京都, 大阪府, 熊本県より, 都市型, 農村型に分け, 各地から2校づつ3年と6年の2学級を選ぶ。対象児童は都市型735名, 農村型703名。計1,438名。第3回子どもを守る会, 文化会講資料,「子どもの文化・戦後10年」による。
 - (12) M. H. Neumeyer, *Juvenile Delinquency in Modern Society*, 1955, p. 225.
 - (13) 例えば, ノイマイヤー前掲書等。
 - (14) D. Riesman, *The Lonely Crowd, A Study of the Changing American Character*, 1950.
 - (15) 「毎日新聞」,1955年12月26日。「一般におとなの世界と, 子例の世界とが, 今日の発達したマス・コミュニケーションでつながれて行く」(南博「世界」1956年2月号)傾向は, 従来の「公式的」な教育心理学や児童心理学に一つの反省をうながすものであろう。
 - (16) G. D. Wieb, *Mass Communication*, in *Fundamentals of Social Psychology*, ed. by E. L. Hartley, 1952.
 - (17) ホクハイマー「ファシズムの教訓」キャントリル編「戦争はなぜおこるか」(「平和問題懇談会 賦」1952年185~6頁)。
 - (18) 宮原誠一,「社会教育の本質」,同編,「社会教育」1950年, 41~2頁。
 - (19) e. g. J. Dewey. *Democracy and Education*, 1916, p. 5. 一般に「コミュニケーションは, 自然への働きかけとしての生産活動とともに, 人間社会成立の二つの基本的条件である」が,「アメリカ的思考は人間社会成立の条件としてコミュニケーションを優先させ, ソヴェートの思考は, 生産活動を優先させる傾向がある。このことは, それぞれの国の社会科学の性格に, 独特のニュアンスを与えている」(日高六郎「マス・コミュニケーション概論」「マス・コミュニケーション講座」第1巻9頁)という言葉を, ここで顧みておくことも徒為ではあるまい。
 - (20) 日教祖機関誌「教育評論」, 第一巻, 第1号, 33頁。
 - (21) P. F. Lazarsfeld and R. K. Merton, *Mass Communication, Popular Taste and Organized Social Action*, in *Mass Communications* ed. by Schramm, 1949, p. 467.
 - (22) e. g. R. M. MacIver and C. H. Page, *Society*, 1950, p. 436.
 - (23) 例えば, その独占の様相は, 日本の新聞を例にとれば, 朝日, 毎日, 読売の三大紙の発行部数は42%を占め, それに日経, 産経の中央紙と北海道新聞, 中部日本新聞, 西日本新聞のいわゆるアロック紙を含めると56%となる。更に一県一紙の地方紙を加えると88%の独占比率となる。(岩崎庄次郎「企業としての新聞の独占」(「思想」1955年2月号, 173頁。)また現在, 朝日, 毎日などの従業員数は千名を超え, その人件費だけでも, 毎月, 億をこえるという。

- (24) 樺俊雄、「近代社会」1951年、146頁。
- (25) 例えば清水幾太郎、「社会心理学」1951年、137頁以下。同、「新しい群集」日本社会学会編、「社会学評論」第6号、2頁以下等参照。
- (26) B. Russell, Let the People Think, 1941, p. 34.
- (27) L. W. Doob, Propaganda, Its Psychology and Technique, 1935, 邦訳春日克夫「宣伝心理学」30頁。
- (28) 拙稿「教えつつ教えられつつ」「ばんておん」第1巻第4号5頁。
- (29) K. Mannheim, Diagnosis of our Time, 1943, p. 21.
- (30) B. Russell, Education and Social Order, 1932, p. 214.
- (31) MacIver and Page, op. cit., p. 436.
- (32) R. Benedict, The Chrysanthemum and the Sword, Patterns of Japanese Culture, 1946, pp. 222~4.
- (33) 清水幾太郎、「機械時代」,「思想」314号3頁。
- (34) Lazarsfeld and Merton, op. cit., pp. 463~4.
- (35) 日本放送協会編「日本放送史」1951年、序文。
- (36) ラジオ東京調査部、1954年11月の調査による。
- (37) Max Picard, Hitler in uns selbst, 1946. 邦訳佐野利勝「我等自身の中なるヒットラー」39頁以下。
- (38) 兵庫PTA協議会機関紙「兵庫PTA」12号。
- (39) C. W. Mills, White Collar, The American Middle Classes, 1951.
- (40) 豊田四郎「学生」岩波講座「教育」第7巻305頁。
- (41) 「朝日新聞」1953年1月17日。
- (42) 清水幾太郎「今日の教育」1946年1月。70頁。同「世代の役割」岩波講座「教育」第7巻30頁。
- (43) 例えば、我々の調査地区においても、地域の問題ととりくんですぐれた活動を示している青年団に学生が参加している例は多く見られる。拙稿「社会教育のための教育調査」(神戸市教育時報)第5号)参照。
- (44) NHKの調査によると家座にラジオのある12—19才の青年層では「大体毎日聞く」というのが74%。1日の平均の聴取量はラジオを余り聞かない人を含めて、平日男子、3時間11分。女子、3時間15分。日曜、男子4時間34分。女子、4時間54分であり、この平日の聴取量は、男女とも全聴取者の平均より少ないが、日曜のそれは男女とも、全聴取者の平均を上まわっている。(布留武郎「ラジオ、映画と青年」「青年心理」第3巻第3号60頁による)。これに比ぶれば、我々の場合は、著しく聴取時間が少ないようであるが、(ラジオの普及率は全国平均59%、我々の地区では64%) いずれにしても青年生活におけるラジオの重要な意味は察せられよう。
- (45) ここでいうのは、いわゆる「つられ聞き」のことではない。「つられ聞き」以前の単なる雰囲気としての影響を重視したいのである。なお「つられ聞き」については、布留氏は、ラジオの開放的な性格の故につられ聞きの多いことは第一放送の好適時間にある番組は、例外なく嗜好率より聴取率の方が高いことから推定できるとなし、このラジオに対する受動的な態度が個人の活動力を失わせ創造的活動を弱める危険性を説いている。(同、前掲書65頁)。

- (46) E. Fromm, *Escape from Freedom*, 1941, pp. 128~30.
- (47) Young, *op. cit.*, pp. 484~5.
- (48) 南博編「マス・コミュニケーション講座」第4巻297頁の記述による。
- (49) 1954年6月の乱斗国会後、ある新聞の仙台支局で、小学6年、中学3年、高校3年に對して「乱斗国会を知っているか」「知っているなら何によって知ったか」その他二項目につき調べた結果は、知っているものは、小学6年80%、中学3年90%、高校3年100%。何によって知ったかには、殆んど全員が新聞ラジオ映画と答え、極く少数の子供が家庭で両親や兄弟から聞いたといひ、学校で先生から教えられたというものは一人もいなかったという。(前掲「マス・コミュニケーション講座」第5巻, 187頁)。以って、現在の青少年の知識における家庭や教師とラジオや新聞、映画の比重の相違を知るべきであろう。そうして、またその「知り方」が問題とされねばならない。
- (50) 谷川徹三「文化論」1947年5月。105頁以下。
- (51) 間宮武「青年娯楽としての放送」「青年心理」第3巻第4号, 64頁。
- (52) 「朝日新聞」1953年1月4日。なお、1951年5~8月実施のNHKの聴取率調査の中から、12~19才の青年層の多く聴くものをあげると「今週の明星」男子58%、女子68%。「懐しのメロイ」男子53%、女子68%。「のぞ自慢」男子53%、女子65%。(布留前掲書65頁)。以って、当時の青年生活における歌謡曲の地位を知るべきであろう。
- (53) 「週刊朝日」1952年6月1日号。
- (54) 苗村富啓「阪神地方における一般人の読書傾向調査」(未刊)
- (55) 「朝日新聞」1952年7月18日。
- (56) 乾孝「流行歌の実態調査」思想の科学研究会編「夢とおもかげ」1950年, 201頁。
- (57) 南博「日本の流行歌」, 前掲「夢とおもかげ」143頁以下参照。
- (58) これらの歌の具体的な分析については、神戸市教委および青少年問題協議会刊の「神戸市青年実態調査」(1952年9月)の拙稿を参照。
- (59) 乾前掲論文。前掲書213頁。
- (60) 園部三郎氏「現代流行歌曲について」前掲「夢とおもかげ」193頁以下参照。なお、藤沢衛彦も1949年当時のアギウギ旋風を以て、戦後の「解放の喜びと、再びのしかり出した反動の黒雲を払いのけようとする青春の思想を撃って、突如吹きまき」ったものとなしている。同「流行歌と国民感情」「文学」1955年12月号, 30頁。
- (61) 西条八十「僕の感想」, 「婦人朝日」1952年9月号。
- (62) 同氏によればNHKのヒット・パレードに出た歌の約半数は映画の主題歌であり、また敗戦以来のヒットソングの30%以上が主題歌である由。同氏, 前掲掲文, 前掲書166頁。
- (63) 「朝日新聞」1954年10月29日。
- (64) 藤浦洸「流行歌の歌詞について」「週刊サンケイ」, 1955年2月6日号。
- (65) 三浦つとむ「浪花節の歴史的性格」前掲「夢とおもかげ」289頁以下。
- (66) 労働省婦人少年局「電球および真空管製造業に働く年少者の余暇生活一年少労働調査資料第12, 13集」72頁。
- (67) Riesman, *op. cit.*, 参照
- (68) Mannheim, *op. cit.*, p. 160.
- (69) ナチスの軍需相シュペーアのニュールンベルグ裁判での告白の一節。日高六郎編「政治と経済の心理学」6頁の記述による。
- (70) 日高六郎「ファシズムの社会心理」「思想」, 1952年11月号。

- (71) ボルクハイマー、前掲論文、前掲書192頁。
- (72) 西村一雄「乙女たちは考える」「思想の科学」第1巻、第1号、59頁以下。なお、「平凡」の魅力の一つが、全国的な「平凡友の会」の組織によって、手紙を交換するペン・フレンドが得られることにあることは、周知の如くであり、またある会社の青年工員の趣味の調査に「趣味は文通」と書いたものが多いという事実は、マス・コミュニケーションに対するパーソナル・コミュニケーションを問題とする際、深く考えるべき問題を含んでいるというべきであろう。
- (73) 井上頼豊「生活と結ぶ『歌ごえ運動』——流行歌のレコードの売れぬかげに」、日教組「教育新聞」1956年1月1日。
- (74) 宮沢昌子「ふだん着の歌」「知性」1955年11月号。
- (75) 関根弘「新しい歌」「文学」1955年12月号、71頁以下。
- (76) 山本太郎「歌ごえの歌詞を批判する」「朝日新聞」1956年4月1日。
- (77) 小野十三郎「現代詩とうたごえ運動」「読売新聞」1956年1月7日。
- (78) 拙稿「諷刺の流行について——落首的精神への警戒」「神戸新聞」1954年4月3日。
- (79) B. Russell, Free Thought and Official Propaganda, 1941, p. 40.
- (80) 「毎日新聞」1955年10月11日。
- (81) 松田道雄「娯楽の位置づけ」「思想」1951年8月号。
- (82) 拙稿「レクリエーションとしての新興宗教——その似て非なる性格について」「神戸新聞」1955年4月11日参照。
- (83) 大阪谷公雄「不良文化財追放」「朝日新聞」1955年9月10日。
- (84) 「朝日新聞」1956年1月5日付の彌彦神社の群集事故を論じた社説参照。
- (附記) 本稿は、旧稿『街頭の青年』(海後宗臣、牧野巽編『講座教育社会学』第3巻『青少年問題と教育』1953年、所収)に、全面的な補訂を試みたものである。しかし、『講座』という形式、執筆時期のズレなどに累されて、量的には3倍近くになる補訂も、多くその意をつくし得なかったことを遺憾とする。(56.4.1)